

機械は息をしているかのよう低音を吐き、データ・プール星霜匣の並ぶ部屋にそれを木霊させる。ごうん、ごうん、と耳に障る音が響く中、部屋の入り口付近から、紙の擦れる小さな音が時折鳴る。

部屋の電気スイッチの下、地べたに座ったキナリが鉛筆を手に持ち、広げた紙に向かっていた。字を書く練習である。ムロビシから不要な書類を分けてもらっては、その書面に並ぶ一字一字を書き写していく。この作業は少女の日課になっていた。読み方を教わるにはムロビシの暇を充ててもらわなくてはならないが、字の形状と羅列の法則を覚えるのにはいい方法なのである。

そうしてキナリが一心不乱に作業している姿を、カラスは星霜匣に浸かりながら眺めていた。決して機嫌が良いとは思えない、不貞腐れた顔を頬杖で支えている。キャレーでアカアりに刺された痕は綺麗に完治しているのだが、それ以上に顔も腕も傷跡だらけで、中には相当深く抉られたようなものも見受けられる。服に関しても補修を繰り返した形跡があちこちに見られる。

カラスはしばらく沈黙していたが、キナリが構ってくることもない状況に飽きたのか、ぼそっとぼやく。

「——勝てない」

「あっ……」

何の脈絡があるわけでもない、たった一言。数時間振りに聞いた少年の声に驚いたキナリは、その拍子に鉛筆の芯を折ってしまい、小さく悲鳴を上げる。浅く息を吐いて、苛立ちを露わにするカラスを向く。

「……おはよう。起きてるの気づかなかった」

「ん」

「勝てないって、アカアリとの組手のこと？」

「む……」

むすつとしたまま頷く。

「……ここに来てまだ二週間だし、そんなすぐに勝つのは無理なんじゃないかな」

どういった切り口で話すべきか思考を終えたキナリが慰めの言葉を投げるのだが、やはり少年に優しさは通じない。

「その二週間、ずっと負け続けているこっちの身にもなってみるよ。昨日だってアカアリのやつに掠り傷すらつけられなかったんだぞ。キャレーのボロ家のときはあんな簡単に手が届いたのに……」

「アカアリ、夜は目が見えづらいんだって。ムロビシ話してた」

「おっさんはあのときオレが圧したのは偶然だったって言いたいんだろ。馬鹿にしやがって」

キナリが勉学に励む間、カラスはアカアリとの組手をすればどうかとムロビシから勧められた。もちろん、アカアリに勝利することを目先の目標として掲げているカラスが断るわけもない。カラスの身を案じたムロビシが、アカアリから刃物を始めとするあらゆる得物を取り上げた素手での対戦を設けたのだが、それでも腕力・動体視力ともに遠く及ばないカラスは、ものの数分で動けなくなるほどに叩きのめされてしまう。酷いときにはそのまま気絶してしまうため、不安を胸に監視していたキナリがムロビシに助けを求めて中断させ、血みどろのカラスを星霜匣に放り込む……というの、ある意味で日課になってしまっている。ちょうど昨晚がその終わり方であった。カラスの機嫌がすこぶる悪いのも、間違いないそのせいである。

「……そっちの字の方は順調じゃんか」

カラスは、キナリの前にある紙を遠目からじつと見る。

「見本の真似して書いてるだけだから」

「ムロビシから聞いたぞ。一〇文字は読めるようになったって。早くおっさんの無駄口やめさせられるくらいになってくれよ」

「努力はしてみるけど……」

それこそ時間を経なければ難しい話だと、キナリは思うだけで飲み込んだ。

二人がムロビシに拾われてから、二週間という時はめまぐるしく過ぎていった。初日こそ知識と実体験が釣り合わず、何をしてもしもチグハグな会話や行動を取っていたが、それも今はかなり落ち着いている。二人の脳には、生活に必要なだと思われる衣食住に関する知識や運動、多少の言語が最初から備わっているとムロビシから説明を受けた。これは廻人^{ねんど}への教育期間を短縮するための共通項であるらしい。倫理的に許し難い行為のようなが、それもある程度黙認せざるを得ないほど、ネヴェリオという国は切羽詰まった状況とも言える。……カラスとキナリには、倫理観といったものは理解できないでいるため、いまいち何が悪いのかは判別できていないのだが。

濡れた前髪を掻き上げる動作を取ったカラスを見、キナリが提案する。

「前髪、邪魔そう。切ろうか。ハサミあるよ」

「いいよ、めんどくせー」

即座に却下して、星霜匣の縁に手をかけて外へ出る。頭を振ったり、ジャンプしたりして水気を切る動作はさながら犬のようだ。仕上げに髪を絞りながら、部屋を出ようと歩き始める。

「朝飯食う」

「仕事部屋に作って置いてある」

「なんだよ、おっさんに作らされたのか」

「ううん。ムロビシも寝ちゃってたし、自分から。いつかここから出て行くなら、それくらいできなきゃと思って」

「あっそ……」

キナリの向上心を意識すると、カラスは自分だけ二週間前の世界に取り残されている気分になる。

アカアリとの模擬戦闘を経て、否が応にも筋肉は少しばかり厚くなった。会話についても、相手への正体不明の不満感は大きく減り、二週間前と比べればかなり円滑にコミュニケーションを取ることができる。その自覚は明確にあるのだが、よくよく考えてみると、キナリには相応のコミュニケーション能力が最初から備わっていたように思える。悔しいとか腹立たしいとか、そういう明解な感覚では片づけられない、もやもやとした気持ちが消えてくれない。

（オレとアカアリが別物だっと思うみたいに、オレとキナリも別物……なのは分かっ
てんだ）

上手い表現が浮かんで来ない。

(自分と比べると、変に焦るんだよな)

気を晴らすように、ばさばさと髪を払って広げる。

(――考えるのはオレの役割じゃないか)

開けっ放しにされたドアをくぐって廊下へと出ると、膝を抱えて座り込むアカアリが二人を出迎えた。普段にも増して覇氣の失せているところを見ると、どうやらここに座ったまま居眠りしていたようだ。

カラスとキナリは睡眠というものがよく分かっている。というのも、二人の場合、夜になると星霜匣の中へと入り、日中に濾過を終えた水溶液をグラス一杯飲み込むことで、ほぼ時差もなく睡眠導入の作用を享受する。目が覚める頃にはいつも水の中を浮かんでいて、呼吸ができないことを思い出して慌てふためく。この一連の流れが二人にとっての睡眠であり、眠気が襲ってきて逆らえなくなるという感覚は分からないのである。

一方のアカアリは、怪我をしていないこともあってか、新人類であるにも関わらず星霜匣に入ることはせず、時折部屋の隅でこうして丸くなってうたた寝程度の睡眠をとることがある。二人が星霜匣に沈んでいるうち、彼女も同じようにしているのかも

知れないが——食事している場面には、相変わらず一度も遭遇したことがない。こればかりは、二週間経った今でも本人の口から聞けるわけでもなく、ムロビシが把握していない部分も多々あるため、謎の多い人物であることに変わりないままだ。

「アカアリ。今日こそお前のその顔面ぶん殴ってやるからな」

「……う」

返事とも言い難い呻き声で、カラスの宣戦布告に適当な応答をする。以前ならアカアリの姿を視界に捉えただけで怯えて身動きも鈍くなったものだが、彼女の扱いにもかなり慣れた。

とにかくアカアリは敵意に対して容赦を知らない。相手が腕を振るえば、その腕を引き千切ることに全力を投じる。「戦い」とはおよそ形容し難い野生を、組手ですらまざまざと発揮するのである。もつとも、言葉の通じない彼女からしてみれば、たとえカラスたちが組手と称していようとも、手を上げるのであれば暴力以外の何物でもないのだろう。アカアリのそういった単純な結論づけを目の当たりにしてきたカラスとキナリは、恐怖感とは別に、彼女の扱い方も少しづつ覚える機会を得てきた。体力面ではまだ勝ちようがないのだが、平常時のアカアリをコントロールすることは多少できるようになっていいる。見た目に攻撃性を見せたり極端に怖がったりすると、防衛

反応、もしくは好奇心で手を出してくるらしく、唯一の解決しようのない問題は、その際の力加減が全く利かないということくらいか。それさえ分かっただけならば、案外怖くないものである。なお、これについてもカラスよりキナリの方が飲み込みが早い。

「おはよう。今日も午後から雨だった」

「うー……」

言葉を理解しているわけではなく、自分に向けて発された音に対して反応を見せているようだ。カラスは彼女のこの反応にあまり興味を持たないのだが、キナリは会話ができていくような錯覚がなんだか楽しくて仕方なく、暇があるとアカアリに適当な言葉を投げて返答を遊んでいる。

そんなキナリも今は挨拶だけに留めてカラスの後を追いつ、ムロビシのいる仕事部屋に入る。雑然とした部屋の中、壊れかけのソファで横になつていびきをかくムロビシを発見したカラスは、ズカズカと近寄って蹴りを見舞う。

「いつまで寝てんだよ」

「んお……———なんだ、ボコボコにされてた割に早起きだね……」

それほど驚くわけでもなく、ムロビシは身を振って目を覚ます。しかしこの男、言

わなくてもいい一言を必ず放つなあと、キナリは内心呆れてしまう。カラスもカラスで、その単調な挑発にまんまと乗っかっていくので、なおさら困ったものである。

「うっせー。髭剃れ、カス。鬱陶しい」

「機嫌は悪いね……」

手荒い目覚ましを受けたムロビシは、身を伸ばし、関節を鳴らし、顎髭をじよりじよりと触ってから起き上がる。まだほとんど目が開いていないところに、キナリから食事の案内が入る。

「朝ご飯できてるよ」

どうせインスタントだけど。キナリは自身の言葉に付け加える。

「ああ、ありがとう。いたたくよ」

食事がインスタントなのはキナリが悪いわけではない。雨毒の影響で作物や家畜の生育が壊滅的に不安定なせいで安定供給がままならず、他国からの輸入に頼らざるをえないのである。膨大な食料を輸入・搬送するには人手や資金が足らず、軽量化を図るためにも乾燥させたり、顆粒状にさせたり、缶詰加工したりするほかない。昨今は大量の野菜を水耕栽培するための高気密工場の建造が各地で進められ、多少はまともになってきたものの、それらが一般市民の手に渡るにはもう数年かかるところだろう。

その数年のうちに雨毒がどうかできればいいんだが——ムロビシが三日に一度は口にする悲嘆である。

「朝飯の前に、今日の予定だけ伝えておきたいんだけどいいかな」

「改まってなんだよ」

寝起きの一服、タバコをくわえて火をつける。

「いやね、みんなでロットラントへ行こうと思って」

ロットラント市街。カラスが妙に羨望を送る巨大兵器ヨサメが悠然と聳える、ネヴエリオ連併国随一の繁華街である。ほとんどの流通はロットラントを経由していくため、ムロビシが買い出しのために車を走らせ向かうのは大体そこだ。いつかは連れて行ってやると約束してもらっていたが、まさかこんなに早くその機会が訪れるとは思っても見なかったカラスは、急に目を輝かせてムロビシに確認を迫った。

「今日、これから行くのか……!? オレたちも一緒に？」

「うん。ただし、昼から夕方にかけて雨が降るらしいし、それまでに帰ってくる予定だから長居はできないけどね」

鼻から煙を吐き出して立ち上がると、興奮して前のめり気味に話すカラスを退け、パソコンの横に置かれたファックス機から一枚紙を手取る。確認するように一瞥し

てから、それをキナリへと渡して再びソファへと腰掛け、タバコの灰を爪弾いて銜え直す。

「保護班本部から夜中に届いた資料」

「……なんて書いてあるんだ？」

キナリはカラスにも見えるように渡された資料を傾けて、二人揃って覗き込んでみる。老婆の顔写真のほか並ぶのは、数十行の細かい文字列。相変わらず文字に関して はちんぷんかんぷんのカラスがキナリへ読むよう催促するが、少女は僅かに肩を竦めて首を横に振る。

「ほとんど読めないけど、この写真の人のことが、たくさん」

書面の一部を指して「ここに廻人って書いてある」と、カラスに説明する。

キナリがすっかり認識して読み書きできるようになった文字は、数字と、常用字のうち約十文字。決して多くない数だが、これはムロビシが業務に忙殺されていたため、なかなか時間を割けなかったことが大きく関係している。カラスとキナリを保護したことで、本部とのやり取りが普段より倍々で増していると嘆いていた。それでもムロビシは仕事の合間を縫って、当初の目標通り二人に関わる単語を教える時間を二回設けてくれた。キナリ、カラス、廻人、星霜匣……これらを読めるようになっただけで

も、キナリの自信のなさそうな顔色から靄は晴れたのである。

「……おばあさんの廻人もいるんだ」

ムロビシを向き直り、言う。

「廻人の人口配分は、ヨサメ暴発当時の旧人類人口比率に準じて決定したって話だからね。老若男女問わずにいる」

キナリの言葉に頷いて話す間も、足はひっきりなしに揺れている。貧乏揺すりというやつだ。何かにイライラしているらしい。こちらから踏み込んだ質問はやめるべきだろうと察してキナリは口を噤むのだが、隣の少年にその気遣いは備わっていなかった。

「足、ぶらぶらさせんなよ。目障りだつーの」

「カラス……」

「あとタバコ、くせーって何回言えば分かんだよ」

「自分には緩いのに他人には厳しいね、カラスくんは」

言って、ムロビシはカラスの顔面に向けて煙を吐きつける。

「くさッ」

「もうちよい口の利き方を心得なさい」

ムロビシは別に怒ったわけではないらしい。ムロビシの年長者としての余裕に、キナリは鼻を掴みながら安堵する。もちろんカラスはそのあとすぐに嘔みついて騒ぎ出したが、その辺の対処についてもムロビシはとうに慣れていた。あまり煩くするのなら連れて行かないぞ、と釘を刺すだけで大人しくなる。

「……そのばあさんがロットラントにいるらしくてね。本部から搜索と保護をしろとのお達しが来たわけ。二人は行ったことがないから想像つかないと思うけど、あの街を一人で探し回るのは到底無理だっくらいい、めちやくちや広い上に四六時中人が溢れ返ってる状態なもんで、四人総出で手分けをしようって魂胆だ。まあ、一人が四人になったところで、数時間の滞在じゃ焼け石に水なんだが……猫の手を借りるよりは幾分マシかな」

吸い殻が満杯の灰皿にタバコを押しやって消火する。

「食料もほとんど尽きてたし、そろそろ買い出しに行かなきゃなあって考えは頭の隅にあっただけど、さすがに寝る前に伝令の電話が来るとは思ってもみなかったよね……。信じらんないよ、うちの会社。いつまで起きて仕事してんだよって。その電話取れる時点で俺も人のこと言えたもんじゃないけど……。いい歳こいたおいちゃんだってソファで不貞寝くらいするよね、普通に」

「起きたてのくせに気持ち悪いくらい喋るな」

「君、本当に学習能力ないね……。愚痴くらい聞いてくれたっていいじゃないの。どうせ食って怪我して寝てるだけの生活でストレスないんだし、おいちゃんの不満半分受け持ってよ」

「どう考えてもケガはストレスだろうが、ボケ」

口を開けば幼稚な口喧嘩に発展させてしまうのは、ある意味カラスが持つ才能かも知れない。そう思うようにしなければ呆れて相手をするのも疲れてしまうことをキナリは実感している。

ともあれ、ムロビシが機嫌を損ねていた理由は分かった。自分たちに向いていないのなら、そう簡単に怒らせることもあるまい。頭を掻きながらテーブルに着くムロビシと同じように、キナリも椅子を引いて座る。カラスだけは落ち着きなく立ったままである。

「……とにかく、俺が買い物しているうちから、二人とアカアリには街中でそのばあさんを捜してもらいたい。時間が限られてるから、詳しい話はロットラントに着いてから一度だけしよう」

「アカアリも一緒かよ……」

「当然」

コンソメスープとパン、ジャム、野菜ジュース。朝食としては、まあ十分な量だろう。ムロビシが固く閉まったジャムの蓋を外すと、食卓に甘い香りが漂う。

「あいつの嗅覚は引くほど鋭いぞー？　どさくさに紛れて逃げようと思っても地獄の果てまで追いかけてくる勢いだ」

「んなことしねーよ、今んとこはな。オレが言ってるのはそこじゃなくて、街ん中に連れてって、オレたち以外が原因で暴れ始めたりしないのかってことだよ」

「たぶん大丈夫だと思うよ」

「……なんで」

「そりゃあね、君。あんだだけ郊外で通行人を殺して回っている女の噂が街に流れないわけじゃないじゃないの。アカアリはこの一帯じゃ『血赤ちあかの亡霊』とか呼ばれて有名人なんだから」

「怖くて寄ってこねーって意味か」

オレも必要がなければ寄りたくないな……ぼやいて、パンをかじる。男二人の様子を交互に眺めたまま、手を膝に置いてじっとしていたキナリが口を開く。

「ねえ、ムロビシ」

「うん？」

「いつもの検査、どうする？」

「あ……」

すっかり忘れていた。ジャムをたっぷり塗りたくったパンを口前で止めたその顔に言葉が浮いて出ている。ムロビシは部屋の三割ほどを占拠している検査器具たちを眺めて、少し考え込むように静止する。

身長、体重、血圧、血液検査。これらを毎朝食前に行うのが日課となっていた。ここで生活する際の条件として提示された、サンプリング調査への協力に当たる。食事を口にした後では正確な値が出ないらしいのだが、すでにカラスは半分ほど食事を終えてしまっている。これでは無理だな……そう判断したムロビシと目が合ったはずなのだが、カラスは何故凝視されているのか理解していないように、「気持ち悪い、見るな」と吐き捨てるだけに終わる。

「——帰ってきてからにしようか。昼食前に終わらせれば、本部への言い訳としては通用するはずだし」

「うん」

「でき、カラスくん、座るつもりがないならアカアリ呼んできてよ。あいつ車に乗せ

るの時間かかるからさ」

「ういー」

予想していたよりも早くロットラントへ行けることになったのが余程嬉しいのだろう。いつもなら指図されると必ず文句を言うのだが、車というキーワードを耳にした途端、最後に残っていた野菜ジュースを華麗に手に取り、足取りも軽くアカアリの鎮座する廊下へと出て行った。

分かりやすい子だね、と見送ったムロビシが、ふと何かを思い出して立ち上がる。

「あ、そうだ。キナリちゃんに言うの忘れてた」

「……？」

仕事机に向かうと、一番下にある——ファイルなどが整頓されている大きな引き出しを開ける。がらがらと大きな音を立てて開いたそこから、オレンジ色が鮮やかな液体の詰められた瓶を二本取り出し、キナリの前にどちらも置く。顔ほどある大きさなので、結構な量が入っていそうだ。

「……これ、なに？」

「二人とも、もうずっと血液検査してるじゃない？ その結果を逐一本部とやり取りしてるんだけど、どうもキナリちゃんだけ栄養失調気味らしくてね。これ飲ませろっ

て送られてきたのよ。栄養剤、ちよつと甘めにつくつてあるつてさ。ほぼ毎回こんな粗食だし、カラスくんと違つて食も細いから仕方ないのかね……。俺もがつつり肉食いたいなあ、肉！」

大声で嘆いたあと、ずずつとジュースを飲み干す。塩漬けされたハムを食べたこととはあるが、ムロビシの懇願している肉というのはどういった食べ方なのだろうか……。そこまで食に執着心はないが、ハムは嫌いではないので気になる。

しかし、今それよりも気になるのは目の前の栄養剤である。恐る恐る持ち上げ、蓋を開け、鼻を近づけて臭いを嗅いでみる。やや薬臭いが刺激は少なく、ムロビシの話していた通り、かなり甘つたるい香りがしてくる。ジャムに負けず劣らずの香りの強さだ。

「一応カラスくんの分も含めての二本んだけど、昨日渡したら『こんなクサイの飲めない』って突つ返されてね。もしキナリちゃんが苦痛でなければ、どっちも飲んであげちゃつて」

「ふたつ一気に……？」

「そんな無茶な！ 毎食後、コップ二割くらいの量で十分。最低でも一本分なくなるまでは継続してもらつて、改善されればめでたしめでたしつてところかな」

朝食と栄養剤の説明を終えたムロビシは、本棚の中段に置いてある荷物を肩から掛ける。ロットラントの件で急いでいるようだ。キナリも慌ててスープを口に含んだと同時に、廊下からカラスの短い悲鳴が聞こえてきた。驚いて空気と一緒にスープを飲み込み振り返ると、部屋の入口を通せんぼするようにして立ち、右腕を押さえて狼狽するカラスの姿があった。挟めるほど力強く引つかかれたのだろう、線を描いた傷から出血している。視線は廊下のアカアリを向いているが、明らかに挙動不審だ。心底不意を突かれたのが手に取るように分かる。

「立とうとしねーからちよつと腕引つ張つただけだろ！ 痛えー……爪立てんなよ、バアカ！ お前が最初から言うこと聞けばいいだけだつーの！」

アカアリ本人に文句を言ったところで理解も了承も得られるわけではないのだが……どうやら咄嗟の判断が仇となったらしい。キナリやムロビシは、アカアリが思うように動かないもどかしさよりも、とにかく穩便に済ませたい思いが強いため、彼女の扱いは相応な時間を割いて慎重に行うのだが、そういう考えはカラスにてんで向かない。そうは言ってもアカアリを部屋に呼び込むことには成功しているので、身を挺した甲斐もあったということか。

のそのそと後をついてくるアカアリに怯えるように一定の距離を置いて、じんわり

と血が浮かぶ傷口を見る。

「あー、クッソ。超痛えんだけど……」

「騒ぐとまたアカアリ刺激するよ」

「痛いモンは痛いのに！ つつーか、いつまで飯食ってんだよ！」

「これこれ、当たり前散らさないの」

カラスの痲癩などキナリはほとんど気に留めていないのだが、ムロビシが社交辞令的に仲裁に入る。

「アカアリも揃ったわけだし、準備が済んだらガレージに集合ね。できれば五分以内でよろしく。二人が用意してる間、アカアリは俺が引き継ぐよ」

言って、ムロビシは空になった食器をキナリに任せると、体を左右に小さく揺らし、て退屈を凌いでいたアカアリの誘導を始めた。いつものように刺激しないよう声掛けから、手招きなどで注意を引く。

いよいよ慌てなければならぬ時間か。キナリも頬張ったパンをスープで胃に流し込んで、食器たちを洗い場に置き、乾燥を防ぐためそれぞれに水を溜める。洗うのは後回しにしてもいいだろう。

左手で蛇口の操作をしつつ、右手でムロビシから渡された栄養剤のうち一本を掴も

うとテーブルを振り返ると——むすつとするカラスが視界に映り込む。血を拭うこともしていないため、傷口から肌を伝って何滴か床に落ちてしまっている。どうして放置しているのか理解できず、小首を傾げて助言してみる。

「……出掛ける前に星霜匣に浸けた方がいいんじゃない」

「んー……」

肯定なのか否定なのか判断のつかない生返事。異見されたのに物静かなままなのは珍しい。気味悪く思いつつも、キナリは乾いたグラスにオレンジ色の栄養剤を注いでみることにした。

かなりの重量の容器を小脇に抱えて固定し、ゆっくりと傾ける。傾斜に耐えきれなくなつて溢れ出てきた栄養剤は思いのほかドロツとしており、グラスの底に当たつてもほとんど跳ね返りさえしない。もっと水に近い質感だと予想していたため差異に怯むが、ムロビシに言われた通りの分量に留め、恐る恐るグラスに唇をつける。口に含むのを躊躇っていると、一連の様子をじつと眺めていたカラスが、ようやくへの字の口を開いた。

「そんなまずそうなモン、よく飲もうと思えるな」

「……変なニオイするけど、甘いなら大丈夫だと思ふ。カラスみたいに鼻良くないし」

「ふーん……。やめといた方がいいとは思うけどな」

「——？」

「絶対まずいって勘がビビツときただけだよ。星霜匡んとこ行ってくるわ」

「うん」

脅かすための悪戯だろうか。忠告のような言葉を残して部屋を出ていくカラスを見送りながらきよんととしてしまうが、悠長にしている場合ではない。少しの勇気を絞り出して、グラスに注がれた栄養剤の半分ほどをぐびりと飲む。

「………にがい」

思わず感想が独り言として外に出してしまうほどの苦さに襲われる。ムロビシが説明していたとおり、甘味も確かについているのだが、苦味の方がそれを遥かに上回っている。不味い……カラスの勘を信じるべきだった……！ 残った半分を口に流し込むのが怖くて仕方がないが、迫り来る制限時間を意識してしまえば自棄だ。グラスが逆さになるまで振り上げて、苦汁が舌に極力触れないようにして胃に押し込む。

（苦い、苦い……！）

飲めば飲むほど苦痛が増す気分だった。嫌悪感に総毛立つのを感じながら、我慢ならずその場で小さく一回跳ね、文字通り臭いものに蓋をするように栄養剤を冷蔵庫の

中にしまい込む。これを長期間かけて二本も空けなくてはならないのかと思うと気が重い。げっそりしながら水道水を捻り出して、数度うがいを行うものの、舌が痺れているような錯覚を覚えるほど、とにかく苦い。

しかし、思いがけず訪れた難関を打ち倒すことは叶った。気分を改めるよう努めながら、早足で自分たちの部屋へと戻ると、カラスが星霜匣の前でじっとしている。負傷した腕だけ溶液に突っ込んで様子を見ていた。脇から覗き込む。

「治りそう？」

「おう。もうちょい」

細いながらも締まったカラスの腕を囲うように、黄緑色の液体の中、青白い光の帯が静かに浮遊している。廻人が触れたときのみ、こういった反応を見せるらしいが、どういふ仕組みなのかは分からない。連日、アカアリに伸されたカラスの容態を見守りながらキナリが汲み取れたことは、あの光は怪我をしていなくとも現れるということと、今のようになら負傷している箇所があれば、より強い輝きを放つ光の帯が監視するように寄ってくるという二点。おそらく自分たちにとってあの光が疲労回復などの効果をもたらしているのだらうと思う。眠りから覚めた頃には光も傷もなくなっているため、確認のしようはないのだが。

今までの経験上、指関節ひとつ分より浅い傷ならば、数分で表面に薄い膜が形成される。その下の損傷が修復しているわけではないため痛みは消えないのだが、ひとまず表皮さえ塞がれば行動できなくもない。これを毎晩繰り返し返していくと、数日で完治に至る。

カラスの皮膚が再生するまであともう一息といったところ。そう察したキナリはカラスの側を離れると、壁際に二つ置かれたプラスチック製の小箱へと近づく。紫と緑の二色。ムロビシから二人に与えられた、急きゅうしら拵えの私物入れだ。そのうち緑の箱を覗き込んで中身を漁る。

カラスはあまり物への執着心がないため、ムロビシの机からくすねてきた飴玉やガム以外、ほとんど空の状態。一方のキナリは勉強道具や自分用のタオルなどをしまひ込んでいる。その底から掻き上げてひっくり返すと、二週間前、アカアリが見知らぬ誰かから強奪してきた財布を掴み上げた。振ってみれば、ちやりちやりと小銭の擦れる音がする。

（お金、ロットラントで使ってみよう）

ロットラントについてはカラスばかりが騒いでいるものの、実のところ、キナリも理由は違えどもそれなりの興味はあった。物流の要であるロットラントは、人や物が

ひっきりなしに動く大きな街だと聞いている。ムロビシの話でしか概要を得ていないため細かな部分までは想像も及ばないが、買い物という行為には特別関心があった。小遣いとして渡されたのはごく少額であるが、数字は読めるし、買いたいものもいくつか思い浮かんでいる。

——少し、ドキドキして楽しみだ。

「うっしやー！」

ふと、カラスが右腕を高く振り上げて叫んだ。どうやら、薄皮一枚できあがったらしい。激しく動けばすぐに開いてしまうが、いつもに比べれば掠り傷のようなものだし、もしばっくり開いても大きな支障はないだろう。近くにタオルがあるにも関わらず服で水気を拭いて、キナリを振り返る。

「車んところ行くぞ」

「うん」

二人揃って浮き足立ちながら廊下へと出、車のあるガレージに向け歩を進める。何と言っても、二人にとっては初めての遠出。気分も自然と高揚する。

「待ちに待ったヨサメとのご対面だな」

「迷子にならないようにしなきゃ」

「それはそれで、オレたちには好都合なんじゃね？」

「あ……そっか」

そうなったとしたら、それはつまり、自由を得るということか。カラスのひよんな言葉を耳にして、自分たちが随分と大きな岐路に立とうとしていることを自覚し、キナリは期待と恐怖を僅かながらに抱く。そんな少年少女の企てを嗅ぎつけてか否か、ムロビシがガレージの入口から顔を出した。アカアリの姿は近くにない。

「お、来たね」

「アカアリは？」

「シートに座らせると暴れるから、荷物と一緒に後ろに乗せた」

ガレージに繋がる段差を降りると、大きな車が目の前に佇んでいた。その後ろに設けられたリヤガラスを覗くと、じつとカラスを眺めるアカアリと目が合う。

「……オレもこの方が安心だな」

「君らは後部座席だからね。後ろから頭取られないように気をつけなよ」

「頭あ？」

「そのままの意味だよ。背後から不意にやられないようになってこと」

アカアリなら十分に有り得るだろう？ ムロビシが冗談で言っているのは分かるの

だが、言い過ぎでも何でもなく、違和感なく有り得てしまふようなのが怖い。

無駄口を叩くのはこの辺りで止め、ドアを開けて乗り込む。建物の外へ車で出たことはないが、ムロビシの忘れ物を取りに何度か車内に潜り込むことはあった。カラスもキナリも慣れた様子で後部座席に着くと同時に、ムロビシの手により火が点いたようにエンジンの起動。二人は臀部を通じてその振動を感じる。

「おお……！」

感動的な体験だと言わんばかりに、カラスが感嘆の声を上げる。ほぼ間もなく運転席の窓を開けたムロビシが、車内に放置してあった小さな機器を手に取り操作すると、外へと通じるシャッターが左右へ重たげに開錠。さらにその先、もう一枚のシャッターが現れるが、上下に開くことでようやく外気が吹き込んできた。シャッター付近から『ピツ』と電子音が飛んできたのを確認し、ムロビシがアクセルを踏み込む。ゆつくりと車が動き出したのを感じしてか、先ほどの電子音は一定間隔で鳴り続け、やがて車体が全て外へ出るとほぼ同時、シャッターは自動で閉まり始めた。

「雨毒の粉塵をなるべく侵入させないための構造になってる。全部オートメーションだから、この鍵を家に忘れて雨に遭ったら死ぬかもね」

窓を閉め、ダッシュボードの上に鍵を置いてムロビシは言う。

「不便だな」

「便利なんだけどねえ」

頭の後ろに手を回しあぐらを掻くカラスは、それはどうでもいいように雑な感想を運転席へ投げるが、ムロビシも同じようにせせら笑った。

四人の乗った車は、舗装されていないだっ広い悪路を往く。穴がぽっかりと開いていたり、隆起したような段差などが現れたりというのはざらだ。道が悪いために、ムロビシの所有するこの車は車高の高い四駆。ちゃんと整備しているのか怪しいが、エンジンはご機嫌に唸りを上げて速度を上げていく。通行人が生身で歩いていることもほとんど有り得ないからだろう、一切速度を落とそうとしないムロビシは、ハンドルも碌に握ってすらいらない。運転し慣れている彼は、どの辺りにどれほどの段差があるかなど心得ているのだろうが、初めて乗車したカラスとキナリは、激しく揺れる車内で体を打撲しないようにするのが精一杯だ。タイヤから伝わる衝撃に驚いては思いの悲鳴を上げる。

「おお、お、おっさん、おっさん！ この揺れ、もつとどうにかならねーのか!？」

「ゆっくり走ればどうにかなるよお。でも今日はちんたらドライブしていられるほど暇じゃないんだわ」

「さつき食べたの、口から出ちやいそ……うつ」

「ぼっ……！ そのゲロ絶対飲め、吐くなよ！」

口元を押しえて青白くなるキナリに辛辣な激励を飛ばしつつ、トランクに押し込まれていたアカアリをちらりと横目で見る。てつきりガタガタになった荷物に埋もれているものだと思っていたのだが、なんと、車体右側に背を、左側に足を伸ばして突っ張ることで体を固定しているではないか。襟元についたファーに顔を埋めて、むしろ居心地良さそうにしている。

(こいつ……こういうときだけめっちゃ頭良いな……！)

運転の荒さへの怒りも収まるほど拍子抜けし、ある意味で感心すらしてしまう。

そうこうしているうちに丘を降り終え、道もいくらか平坦になって揺れが落ち着いてきた。ようやく一息つく余裕を得た——キナリはまだ気分が悪そうに嘔えずきかけているが——二人へ、ムロビシは前方を指差す。

「ちょうど真正面に、他の建物よりもこんもりした部分あるだろ？ あそこがロットラントの玄関口になる」

多少の揺れはあるものの、視線の維持くらいはなんとかできる。ムロビシの示した方向を見ると、確かに一部分だけ分かりやすく建物の高さが違っている。来訪者を待

ち構える大きな屋根はアーチ状を描いてはいるものの、妙に角張っていて無骨な印象だ。

「三年前、最初に雨毒を観測したときが一番多く人が死んでね。そのときに望まず空き家になった民家を解体することで捻出した建材を使って、主要な街道に屋根を取り付けたんだ。雨毒が降ってから街の中まで砂埃が舞うまでのラグを設けるのが主な目的だな。その中でもあそこが主幹道路ってことで、簡単な検問が敷かれてる」

「いちいち難しいな……。取り敢えず街に入るならあそこからってことだろ」

「まあ、そういうこと」

さて、とムロビシは話を切り出す。

「ちよいと予定変更。ばあさん捜索についてのたまかな流れだけど、今、街に着くまでに説明しよう」

「おう」

ムロビシの提案に、カラスが待つてましたとばかりに快く返事をする。彼の場合、別に大きな目的があるがための上機嫌なのだが……円滑に会話が運ぶのなんなんでもいいだろう。ムロビシは隣の助手席に置いた自身の荷物をまさぐりながら、やや早口に話を始める。

「検問を通過して道なりに真っ直ぐ進むと、でかい駐車場が設けられている中央広場へ出る。そこに車を置いてから二手に分かれよう。おいちゃんとカラスくんで購入出し、ヨサメ観覧を終えてから搜索へ。アカアリとキナリちゃんは最初からがんばって人捜しすることです」

「……アカアリと？ 二人だけで？」

「そう。こここのところのキナリちゃんを見てる分には、たぶんアカアリを上手いこと扱えると思ってね。カラスくんにはそんな芸当できないだろうし、ヨサメを案内できるのはおいちゃんだけでしょ？ アカアリを単身で野放しにするわけにもいかないなれば、これがどうしたって妥当なのよ」

突然の告知に、カラスとキナリはぎょっとして互いを見つめ合った。ただでさえ車酔いで混濁していたキナリの血色がさらに青褪めていく。体中に目一杯力が入っているのか、唇を真っ白になるまで食いしばる少女の様相を見、今にも泣き出しそうな顔もおもしろいなど、カラスは意地悪く歯を見せて笑う。

「キナリ、おまえ今日死ぬんじゃない？」

「……」

「顔、引き吊ってるぞ」

言つて、キナリの頬を両手で挟むようにして軽く叩く。見る見る緊張していつているのが分かるが、しかし、仮に自分が彼女の立場だったとしても、同じように堪まったものではないと思うはずだ。アカアリは猛獣そのものに紛いがない。ましてやキナリはカラスと違い、体を鍛えることも全くしてきていないことを考慮すると、ムロビシに言い渡された組分けは謂わば死亡宣告に値するだろう。不幸感を露わにするキナリを目の前に、この役割を与えられずに済んだことを心の底から喜び安堵する。

以前と比べれば、キナリがアカアリの扱いに慣れてきたのは事実なのだが、それはあくまで住処という環境下においてのみの話。今日、これから向かう大都市で同じように振る舞うなどというのは到底無理ではないか？ 人生経験のごく浅いキナリですら即座にそう考え及ぶほど無謀極まりない提案なのだが、ムロビシときたら、何故かやたらと楽観的に言葉を続けるのだ。

「もしアカアリが暴走したとしても、下手に止めようとしなくて放置してくれていいからね。星霜匪のない環境で大怪我でもしようもんなら、例え廻人であろうが、旧人類と同様、致命傷に直結する。絶対に死なない体ってわけじゃないことは忘れずに。なアに、アカアリのそういう突拍子もない動きだって、ある種の重要な役割でもあるから心配しないでいい」

「……どういうこと？」

今は不安なほど静かなアカリだが、どんな些細なことでスイッチが入るかも分からない。普段家にいるときでもそうだ。万が一の際の対処については念を押して聞いておくべきだろうと吐き気を堪えて問いかけるのだが、対してムロビシは、間近に迫ってきたロットラントをじっと見据えて、これまでの冗長な様子を一変させ言葉を選ぶように小さく唸る。

「街に着けば雰囲気で分かるとは思うけど——まあ、新人類の存在をアピールする機会ってとこかな。ばあさんも騒ぎを聞きつけて姿を現すかも知れないじゃない？」

釈然としない物言いのあと、「はい」という呼び掛けと共に、出発前に確認した書類を今一度渡される。カラスが身軽に受け取ると、二人の視線は老婆のしわくちやな顔写真へと自然に向く。

「よく見れば見るほど、シワシワで変な生き物みてーだな。キャレーのジジイも似たような感じだった気がすっけど」

助手席のシートにしがみつきなながらじっと見つめていたカラスが、身も蓋もない率直な感想を放つ。

「長く生きた人間なら誰しもが辿るのが老化現象さ。君たちだって例外じゃない」

「オレたちがそうなら、おっさんだって一緒だろ」

ムロビシが小さく笑いながら「暴言はやめなさい」と注意するのを眺めるキナリは、全く説得力がないなあと呆れ顔である。思ったことを口にすればカラスがすぐに逆上するため、相手を悪く言うべきではないと、キナリはここ数日で学んできた。ちょうどその対象である老婆はここにいないので問題ないのかも知れないが、なんとなく、心地の良いものではない。だからと言って、カラスの発した感想も理解できなくはないし、二人を軽蔑するという感情が湧かないのは事実であるので、彼らと同類であると考えられるのも誤りないだろう。ほぼほぼ無為な思慮に意識を割くのを終え、キナリは書類に視線を戻す。

無駄話はこちらまでだと言わんばかりに右手をハンドルから放し、カラスがくしゃりと掴んでいた書類を大まかに指差す。

「ばあさんの名前はケエ。身長はキナリちゃんより頭一個分くらい小さい、かなり小柄なお年寄りだね。キャレー廃街とは、ロットラントを挟んで反対に位置するベルタラントって集落から逃げてきたらしい。どういう経緯でそうなったのかは本人に聞いてみるとして……とにかく、その顔写真だけでもしっかり覚えてちょうだい」

書類に載っている画像は質の悪く白黒のため細かい顔立ちまでは把握できないが、

大体の輪郭やパーツの位置は見て取れる。特に髪は特徴的で、黒っぽい髪に白髪が多数に混じっており、それらを後頭部で丸めるようにして結っている。常に髪をまとめているとは限らないだろうが、長さはそれなりにあるはず。カラスは別としても、時折髪を結うことのあるキナリは悪調で冴えない中でも、そこまでは考え至ることができた。

「コピーは一枚取ってきてある。今渡した分はキナリちゃんに持ってもらって、不安なら何度か見直してもらっていい」

「だってよ。ほい」

ムロビシの説明を受けたカラスが、握り締めていた書類をキナリへと渡す。手荒に扱ったためにも見るも無惨に傷んでいる。

「……ぐしゃぐしゃ」

「写真さえ見れりゃいいだろ」

キナリの不服そうな表情をルームミラー越しに見つつ、ムロビシは軽くブレーキを掛け、車を減速させていく。カラスが何事かと前方を確認すると、すでにロットラントの玄関口が目と鼻の先まで迫っていた。

「ほら、検問だ。ここだけでも静かにしてもらえないかな？」

四人を乗せた車の姿を捉えるやいなや、簡素な検問所に常駐しているらしい男が二人、足取り重く外へと出てきた。厚着のそれぞれは深々と帽子を被り込んで、掌大の端末機を握っている。ムロビシの運転で車が完全に停まると、その左右を取り囲むようにして歩み寄ってきて、一人は運転席のムロビシを、もう一人は後部座席のガラスとキナリを覗き込む。

ムロビシに言われた通り大人しくしながらも、車の外の男を警戒する二人。仏頂面で見つきの悪い中年の男だ。年齢はムロビシより少しばかり上だろうか。じろじろと嘗め回すように車内を眺める間、敵意とも言えるような懷疑を隠さずにいる。それが癪に障ったのか、男を睨んで返すガラスを横目に見て、すぐにいきり立たなくなった。だけ褒めるべき成長点であることを、キナリはひっそりと思った。

一方、ムロビシの横についていた方の男は、手に収まる機器を操作して息をついた。「またあんたか。最近よく来るな」

「ワケあって家族が増えたもんでね。いつも通り、日用品の買い出しですよ。問題あるかな？」

「家族？」

顔見知り程度の会話が交わされている中、後ろの二人の様子を見ていた男が戻って

来て言う。

「……この時世にガキを二人も引き取るかね。どっから拾ってきた？」

「やだなあ。そんなじゃないですって」

「新人類だか何だか知らないが、あんたら推進派はいつまで粘る気にいるんだい」

「僕も雇われの身なもんで、承知していかないことはお答えできない。悪いね」

皮肉ったらしく応対したムロビシへ、機器から吐き出された一枚紙を渡す男の顔には、明らかな嫌悪感が滲んでいる。

「先日の星霜匣施設の強襲事件も収束しちやいない。騒ぎを起こしたら、子供相手だろが容赦ないからな」

「はいはい。寒い中、ご苦労さんです」

「……早く行け」

男は小さく舌を打ち、警告を聞き流すムロビシにそう吐き捨てた。

窓を閉め、勢い良くアクセルを踏み込むと、ムロビシも不満そうに鼻を鳴らす。

「まったく、偉そうにしてくれる」

男二人の姿が車の遥か後ろに遠退いていくのを見る限り、どうやら検問というのはこれで終わりのようだ。息苦しさを放散するため大きく息をついてから、カラスはム

ロビシへ問いかける。

「いろいろ分かんねーこと言ってたんだけど、あいつら何者だよ」

「自警団っていう民間組織だ。ロットラントの治安を守るとかいう名目だけど、俺ら推進派を邪魔しようとする躍起になってる保守派の兵隊蟻でもある。このペラ紙をもらわないと街にすら入れない」

男から渡された紙を振って示す。

「車のナンバーとか入門時刻とかを控えたつつー証明書だな。中で悪さ働いたやつをとつつかまえやすくするシステムの一環さ」

「ふーん……。その、推進派とか保守派とかって何」

「あれ？ 話してなかったっけ？」

「名前は聞かされた気がするよな、しないよな」

整備された道路を進むと、次第に行人人の姿が見え始め、街の景観を醸し出してくる。ほとんど初めて見る「他人」。キナリはカラスとムロビシの会話に耳を傾けつつも、目の色を変えて、窓の外を眺めずにはいられない。男も女もいれば、その他人たちが各々の思考を持って歩き、街角で買い物に勤しんだり、疲れ込んだのかしやがみ込んだりしているのだ。それが何十、何百を越す大きな規模で。事の大きさを考える

ほどに、キナリの頭は沸騰しそうになっていた。

「ものすごく簡単に言うと、雨毒をどうにかするのに新人類を登用すべきだって主張しているのが俺たち推進派で、そうじゃないのが保守派だな。雨毒が止まないって状況なだけに、ネヴェリオは新人類の開発計画を国策として掲げているんだが、他国は当然、倫理問題がどうのこうのと騒ぎ立てて、保守派もそこに乗じてるって構図かね」

「リンリって？」

「人が人を造ることは果たしていいことなのか、それともどんな状況であれ絶対的に悪いことなのか……それを判断するための至極曖昧な概念さ。何百年も暗黙の了解として禁じられてきた生命構築の研究が、人類滅亡を予感させる今のタイミングで封を開けられたという意味じゃ、君らは良くも悪くも注目の的だからね」

「あっそ……」

「カラスくん、理解しようとしてもいないのを顔に出すの、もうちよいどうにかなんないかね。……何も知らない張本人である君たちよりも、外野は遥かに新人類開発計画に否定的だ。実は、その温度差を知るためにロットラントへ連れてきたところも大きい」

道成に真っ直ぐ進み続けると、大きく開けた場所へと出る。大量の車が整列して置かれていたのを見る限り、これが先にムロビシが話していた駐車場の間違いなさそうだ。するといよいよ人の数は爆発的に増え、どこを見回しても動的な存在が周囲を徘徊している世界が視界いっぱいに広がる。この光景に焦がれていたはずなのに、いざ目の前にしてみると、キナリは形容し難い恐怖感に襲われ始めた。外見以外の一切の素性が知れない者たちの海に潜り込まなければならぬ。そんな未知なる不安を感じると同時に、あれほど恐ろしくて仕方なかったアカアリとの同班行動も、見知った彼女がいるのならば、街中を歩くのも多少気が紛れるかも知れないと考えている自分に気づく。果たしてアカアリが頼るべき対象となり得るのかは分からないが、有事の際、一人で対応するよりは心強そうだ。

分担行動執行の時間が目前に迫ってくる中、キナリはようやく思考の整理、説明の咀嚼をし終える。

「……保守派って人たちは、何で邪魔してくるの？」

「さっき話した通りだけど——新人類のことが怖いのかもね」

なんてこともないように答えたムロビシは、ギアをバックへと入れると、慣れた手つきで車を止め、いくつかの操作を経てからエンジンを切った。助手席に散らかった

荷物の整頓を始める。

「見てくれは自分たちと何一つ違わない新人類の、一体どこが自分たちよりも優れていて劣っているのか。それが分からないことも怖いし、分かったとしても、その差異を認めるのが怖い。自分らが及ばないような点は、特に——検問の連中の様子からも感じるところはあったでしょ？」

「……少し。街に着けば分かるって言ったの、このこと？」

「そつ。そして残念なことながら、俺が推進派の人間であることはすでに自警団にバレてる。そんな男が、突然見も知りもし得ない子供を二人も連れて来たとなると、まづ君らを新人類と疑うほかないだろう」

なるほど、検問の二人がその通り踏んでいるのだとしたら、あの敵意も合点がつく。同時に、そういった世情への理解が進めば進むほどに、自分たちがロットラントの地に踏み入ることは、想像していたよりも遥かに大事であるという因果を自覚し始める。外出と聞いて浮かれ心地でついてきたことを、少なくともキナリだけは酷く後悔していた。

「門番が言った、星霜匣施設の襲撃事件って話は聞いてたよね？」

「あー、それ。オレも気になったやつ。誰が何したんだよ」

カラスですら気になることだったのか。キナリは一切顔に出すこともなく、そっと驚く。

「ネヴェリオがロットラントで暮らす廻人のために、有料で星霜匣を利用できる施設を建てただけで、自分たちだけ搾取されていることに納得のいかなかった新人類たちが、武力行使で施設を占拠しようとした事件があったんだ。結局、それに参加した新人類は全員自警団に拘束されたらしい。ごく最近のことだから、ロットラントの住民もかなり神経を尖らせてる」

「だ……だとしたら、アカアリを連れて行くのは、やっぱり危ないんじゃないか」
「まあね」

パンパンに膨れた小さな肩掛け鞆を片手に運転席のドアを開けて外へ出るムロビシを真似て、先にカラスが降り、寸分遅れてキナリも同様に車内と別れる。車酔いのつらさを思い返し、帰りもまた、あの嫌悪感に浸らねばならないのかと思うと憂鬱で仕方がない。一向に気分の晴れない状況が続くのを悲しみながらスライドドアを閉める。二人がそうして体を伸ばしたりし始めた頃、ムロビシは車の後方へと回っていた。

「ただね、保守派の連中は少し調子に乗っているとこもある。人工生命への反感が強い今なら、推進派を黙らせることもできるんじゃないかってな」

言つて、トランクを開けると、アカアリがひよいと跳び降りる。車内に詰め込むまでは心配りしたのだが、出てくるときは随分と簡単なものだ。

「そこでこの子の出番よ。みんなの嫌われ者である推進派のおいちゃんが、巷で噂の殺人鬼を連れて歩いているとなれば？」

「アカアリも推進派かもって思う？」

「それ！ ぶっちゃけ、街を闊歩するだけでも十分な抑止効果はあるだろうけど」

不敵に笑むムロビシが市街を一瞥する。つまらなそうに頭の後ろで腕を組んで呆けていたカラスも後を追うと、幾数人かの通行人がこちらを訝しげに眺めていることに気づく。

「やっぱり一暴れしてもらった方が、印象付けとしては光るものがあるよねえ」

「暴れんのはいいけど、そのあとちゃんと止めに入れんだろうな？ 言うこと聞かせてるうちに雨降っちゃいましたくなんて、マジで勘弁だかん」

「それはアカアリの気分次第だから何とも言えないなあ」

落ち着かない様子で左顧右眄するアカアリから三歩ほど距離を置き、ムロビシの無責任な物言いに、カラスが息をつく。

「……時間ねーんだろ？ 早く予定通り動こうぜ」

「だね。検問と、この立ち話の時間で俺たちが街にいることはある程度お知らせ済みだ。あとはこちらの広告塔ちゃんがどれだけ騒ぎを大きくしてくれるか、だな。そのおまけでケエバあさんも出てきてくれることを祈ろうか」

いつの間にかケエ搜索という本来の目的がおまけになっっている。それだけムロビシの中でも今回の指令は無理難題ということなのだろう。実際に来てみてキナリも実感したが、この巨大な街からたった一人を捜し出すというのは確かに無謀に感じられる。街の中央通りは屋根で覆われており、所々設けられた大天窓から空模様を伺うことができる。その安心感が大きく影響しているのだろう。四人のいる駐車場は街の心臓部ともいえる場所で、最も人通りの激しい地区になる。これから降ると言われている雨に備えるためだろうか、行き交う人々も足早だ。ここから見渡せる範囲でも相当な人の密度だというのに、ロットラントはその何十倍もの面積を誇る。ケエが外にいるならまだしも、屋内に潜んでいるのだとしたら……まず見つけ出すのは不可能だろう。ムロビシの諦めをいくらか察する。

「さつき言った通り、ここで二手に分かれるよ。俺たちは西側、キナリちゃんたちには東側を頼もう。それぞれ昼の鐘が鳴ったら、この車の前に集合すること。ただし、昼前に雨が来そうなら早めに切り上げるんだよ。しつこいようだが、廻人であったと

しても雨毒には勝てない。これは一番重要なことだから忘れないようにね。雨の気配に関してはアカアリの鼻が利く。様子に変化があったら空模様を気にした方がいい」

「うん」

「よし！ じゃあ、解散！ くれぐれも気をつけて」

「がんばって生き延びろよー」

全くの他人事のようににやつきながら手を振り、ムロビシと共に去っていくカラスへ、キナリも胸の前で小さく振り返す。しかし、二人の姿が見えなくなると、途端に不安に蝕まれる。

アカアリへの恐怖も完全に払拭できているわけではないが、それよりもやはり、周囲の視線の方が気になる。ムロビシの顔がどれほどの人間に知られているのかも未知数なだけに、少しでも気になる動きを取る通行人すべてに注視してしまう。どこから何が飛んでくるか分からず肝が冷えて仕方ないものの、とにかく時間も無い。いち早くここから歩を進めるべきだろう。

キナリよりも遙かに多く目配せを続けていたアカアリを見上げると、彼女もそれに反応して目が合う。普段より多少過敏な反応を見せているが、興奮状態というわけでもないようだ。まだ危機感を覚えるような具合ではない。

「カラスとムロビシ、行っちゃった」

「……」

言葉が通じないのは分かり切っているのだが、声に出さなければ不安を発散できない相だ。

「……アカアリは、こういうところ怖くない？」

「……う」

「うん……どっちの返事か分からないね、やっぱり……」

「うう。うー」

何も通じてはいない、キナリの声に対する反射的な返事。それは分かっているのだが、問いかげに「反応があるだけでも、今は俄然嬉しくなるものだ。

「あ、あのね。ケエ捜しの前に、わたしも買いたい物があつて。すぐ終わると思うから、いいかな？」

「……」

アカアリが首を傾げて黙り込んでしまう。彼女とのやりとりは、大抵こうして唐突に終わりを告げる。

「えっと……いいってことで、いいかな……」

ここしばらく人間らしい生活を送ってきたが、そのうちほとんどはムロビシとカラスに主導権があった。別にその境遇を恨んだこともなかったし、あえて言うならば、自分で発言する必要もなく物事が進んでいくのは気楽でいいものだと思っていた。そう思っていただけに、今のこの状況は非常にやりにくい。アカアリが嫌がるような行動だけは取らないことを第一に、様子を見ながら歩き始めてみると、キナリの後を疑いもなくついて来た。ただ移動しただけなのだが、二人にとっては大きな一歩である。

安堵に胸を撫で下ろすのも束の間、人混みの中を進むにつれ、アカアリを捉えた人々の動揺が目につくようになる。おそらく噂通りの風貌を目にして驚いているのだろうが、近くの知り合いらしき人間へ潜め声で話す以外アクションを起こす者はいない。痛い目に遭いたくはないのだろう。何せ流言では、この女、返り血に染まり彷徨う亡霊なのである。ともすれば、その濡れ血に成り代わるのは彼女の手にかかった者によるもの。そうなりたくない思いは、キナリも痛いほどに分かる。触らぬ神に祟りなし。これほどの適語もない。

あまり御利益のなさそうな神を引き連れて、キナリは路地に佇む小さな露店を見つけた。食料品や調理器具など分かりやすいものは置いておらず、細々とした生活雑貨

が所狭しと陳列されている。どれも華美とは程遠く、誰が用いようとも目立つことのない外見のものばかりだ。鏡や櫛を筆頭に、何に使うものなのかも分からぬものも多い。あの中に目的の物品があるかも知れない。遠目に通してそう思うのだが、勝手が分からず、露天商との距離を詰めていく。商品に埋もれるように座っていた女店主のほぼ目の前まで寄ったはいいが、なんと話しかければいいものか。うそうそとしていると、店主の方が痺れを切らして声を発した。

「子供なんて珍しい。何が欲しいの。ちゃんとお金持つてる？」

「ひっ——」

声が大きくてびっくりして小さく悲鳴を上げてしまう。別段攻撃的なわけではないのだが、こんなに近くににいる相手に出す声量ではない。商売人の性なのだろうか。慌てて財布を両手持ち、顔の前に構えて見せると、キナリが冷やかしないで確認して納得したのか、女店主は小さく頷いて微笑んだ。

「お姉さんと買い物かしら」

「おねえさん？」

「後ろの美人さんは他人様？」

誰のことだろうか。店主の視線の先を一顧すると、アカア리가きよとんと棒立ちし

ていた。

「アカアリは——ちがう。……ます」

そういう関係性ではないことを示し、敬語を意識して訂正する。おかしくなった結句にふつと嘖いてから、店主はキナリを歓迎した。

「あらあら、それは失礼しました。目新しい物は少ないかも知れないけど、ゆっくり見てらっしゃい」

とても明るくて可愛らしい女性であると思った。街にいる人間は皆揃いも揃って疑問の男たちのようなのではないかと猜疑心に絡まれていただけに、笑顔を向けられているだけでも気持ち華やぐ。

店主の機嫌は上々のよう。まず一つ不安を解消したキナリが、ようやく商品を覗き込むにまで至る。よくよく見てみると、それぞれの品は派手とはいかずとも、少々の飾りは為されているようだ。元よりムロビシが買ってきた物しか使ったことのないキナリにとって、その最低限の装飾からさえ鮮烈な印象を受けるのである。

レース生地をあしらった髪留め。幾何学模様に織られたコースター。金属を造形した首飾り。煌びやかに映る商品はどれも目新しい。右から左へと一瞥しているうち、好奇心に丸まったキナリの目に留まったのは、赤い四本組のヘアピン。そとつまみ

上げ、ひっくり返したり、撫でてみたり……発色よく塗装されたそれを観察し終え、購入しようと決断して居直る。

さて、そうすると再び困るのは、ここからの声掛けである。先程は店主が先陣を切ってくれたおかげで選別作業に入れたのだが、今度こそは自分から小さな決意を表明しなければならぬ。

これが欲しい、だろうか。

いや、所持金も多くないことだし、それよりも先に値段を聞くべきかも知れない。財布の中に収まっている硬貨の数は何度も確かめて完璧に覚えているはずなのに、いざとなる急に不安になってしまう。商品を手にして完全に静止した少女をおかしそうに見守っていた女店主が、やはり催促の言葉を掛けてくれた。

「それでいいのかな」

「いつ……」

ほとんど反射的に呻くような声が漏れる。恥ずかしく思いながらも、助力してくれた店主に意志を伝えなければ。

「いい。です」

「うん。二〇ピルクだね。持ってる？」

二〇といえば、一〇がふたつ。ピルクはお金の単位のことだとムロビシに教わった。一と〇が刻まれている硬貨を、口の小さい財布の中から必死の形相でまさぐり指に挟んで店主へ見せる。「どれどれ」と愛らしい笑顔のまま硬貨を眺めると、一度だけゆつくりと頷いた。

「それは一〇〇ピルクだ」

「……足りない？」

「足りるよ。同じ物が五つ買える」

「五個……！」

これは思いもよらぬ大金だ！ 正直なところ、所持金にはそれほど期待していなかったのだが、予想していたよりもかなり多く入っているらしい。大事に握りしめている一〇〇ピルク硬貨は、もう一枚財布の中に収まっている。ヘアピン以外にもいろいろと買えるかも知れない。キナリはパツと目を輝かせると、もう一つ気になっていた黒い髪紐と、同じ形の白い色違いのもの、そしてその隣に置いてあった綺麗な青い装飾品を指さす。

「この三個も欲しい」

「はいはい」

喉に詰まったまま出てくる気配のなかった言葉が、高揚感に任せて自然に外へと飛んだ。見るからに元気づいた少女の言う通り、店主はその全てを小皿のような木の器に取り置いて並べ、キナリの目の前に差し出して見せる。

「この青いブローチは少し高いよ？ 全部合わせて二五〇ピルクだけど、いくら持つてるの？」

「一〇〇がもう一個と……えっと……」

残りの硬貨を一枚ずつ引つ張り出そうとするのだが、取り口の小ささに四苦八苦する。やがて面倒になって財布を逆さにして掌に全て広げると、店主は困ったように眉尻を下げて苦笑した。

「足りないね」

「足りない……!?!」

「三ピルクだけ」

「三だけ……」

金が足りないということとは、いずれかの商品を諦める他ないというだろう。世知辛い宣告に動揺したキナリは、店主の言葉を鸚鵡返しするだけになってしまった。

全財産を華奢な手に握り締め、俯き加減に選んだ商品に目配せを続けていると、女

店主が商品台の脇に置いてあった紙袋をめくり、片手を中心に入れ、自立するよう広げながら言う。

「そんな悲壮なお顔には耐えられないね。いいよ、足りない三ピルク分は値引いてあげる」

「……？」

「オマケしてあげるってこと。持ちやすいように袋に入れようね」

「うん……！」

興奮気味に頷いたのを直後恥ずかしくなつて落ち着き、頭を下げる。

「——ありがとう」

「いいのいいの。装飾品にお金を掛ける人なんてめつきり減っちゃったし、こっちにとつてもありがたいお客様なんだから」

ブローチだけは新聞紙で丁寧に包んでくれている。見慣れない所作だが、店主の手際と心遣いに感心する。キナリの好奇の矛先も、彼女にとつては日常の何気ない動作に過ぎない。作業の途中、余裕の面持ちで談話を持ちかけてくる。

「全部自分で使うの？」

「ううん。自分のは黒い方のリボンだけ。赤いピンはカラスで、青いのはアカアりに

あげる。リボンもう一個はムロビシ」

「後ろのお姉さんがアカアリさんでしょ？ カラスってのと、ムロビシってのは？ お友達？」

「ムロビシは、おじさん。髪の毛ボサボサで、いつつも結んでる。カラスは同じくらの歳。口に入りそうなくらい前髪長いのに、結んだりするのもめんどくさいって。でも、やつぱり邪魔そうだから何かないかなあって。ピンで留めるだけなら、多分そんなにめんどくさくない」

「そう。みんな喜ぶといいわね」

「うん」

笑みを絶やすことなく、キナリのたどたどしい話を最後まで聞くと、そう言葉を添えて商品の入った紙袋を手渡した。それと交換するようにして、キナリの細っこい掌から硬貨が離れ、店主の勘定を経る。商品の重さもサイズも大したものではないが、キナリにとっては十分に収穫のある重みに違いない。財布をポケットにしまい込み、受け取った袋を大事そうに両手に抱える。アカアリは紙袋の擦れる音に興味津々だ。

店の前で嬉しそうにするキナリへ、店主は椅子に腰掛け、なんてことのない調子で疑問を口にしてきた。

「ところで、お嬢ちゃんたちはさ、新人類よね？」

急なことに、ぎくりとする。キナリにとつて、その言葉は束の間の幸福感を一瞬で破壊するに余る衝撃であった。目をぱちくりさせ、一切の動きを止める。ちようど、初めてアカアリと遭遇したときのような焦燥。予想外の展開に巻き込まれると体が強ばってしまうのは悪い癖だと危惧しながらも、カラスのように思考を体現させるのは難しい。頭の中ではこんなことが巡っているのに、視線を逸らすことすらできないほどこに。

優しい人だと喜んでいたが、彼女が新人類を認識していることまで考え及ばなかった。そればかりか、彼女が保守派の人間である可能性も当然ある。どつと押し寄せてくる疑念の波に苛まれるも、慌てた様子の店主が次に放った「違うの！」の一声で金縛りが解かれる。

「ただ興味本位で訊いただけだから！ デリケートな部分に触れたようならごめんなさい。こんな可愛いお客を自警に突き出したりなんてことはしないわ」

「……………」

「その感じだと、信じてもらえないだろうけど……………」

すでに顔には違いありませんと言わんばかりの反応が浮かんでしまっていたではな

いか。店主の口振りからしても答えは察しているようだ。

「家族のために買ったって言うならまだしも、少し不思議な言い方をするものだから。そっちのお姉さんも、プレゼントをもらうっていうのに何も言いやしないし、もしかしたら——と思ったのよ。見た目も巷で人気の幽霊そのままだし」

アカアリの噂は知らないものだと思っていたのだが、違ったようだ。確かに店主の方から危害を加えてくる様子もないのを観察しながら、この際、もう少しだけ雑談を続けようと試みることにした。

「……わたしたち、目立ってる？」

警戒しながらの問いに、店主は大きく頷く。

「ええ、大いに。それにあなたのその服、新人類への配給服でしょ？ 新聞でよく見るもの」

「……拾った。机に置いてたから」

「ふうん……そういう渡され方なのかな？」

言葉少ななキナリの証言だけでは状況が飲み込めないが、店主は相づちを打ち、世話を焼く。

「庶民の私に詳しいことは分からないけど、その身なりでこの街に来るのはあんまり

オススメしないわよ。まるで自分が新人類だって宣伝してるみたい」

「そう、なんだ」

そういったような話はムロビシから聞いていない。そのほかに教わるべきことが山のようにあったのを考えれば致し方ないのだろうが、ますますロットラント観光などと悠長なことを言っではいられない。

「古着屋もあるにはあるけど、みんな安く済ませようと同じことを考えるから、いつも品薄なのよね……。ああ、でも、子供服は需要がないから少し多めに置いてあるわよ。お嬢ちゃん、細いから入る物もあるかもね？ あとで保護者さんに連れて行ってもらったらどうかしら」

「そっか……。たくさんありがとう——でした」

「どういたしまして。気をつけてね」

「うん。ばいばい」

愛嬌の満ちた笑顔で手を振る女主人へ、くすぐったく思いつつも、同じようにして別れを告げることにした。

左腕には自分で買いたった物を成し遂げた戦利品が、紙袋に包まれてすっぽりと収まっている。手で握っては、せっかく包装してもらったのを崩してしまいそうで怖かった。

歩調に合わせてガサガサと擦れる音を聞きながら、今まで感じ得なかった充足感に体が軽くなった気分だ。

ああ、なんと幸せな時間だったのだろうか。肝の冷える瞬間もあったものの、想像もし得なかったような親切な人と会話ができた。完全に浮かれながら大通りへ戻ろうとしたところ、ふと聞きそびれたことを思い出して立ち止まる。

(さっきのお店の人に、ケエのこと聞いてみなきゃ)

本来の目的は買い物ではなく人捜しであった。何かヒントになることを知っている可能性もある。自分たちの身なりの件に関しても不安が拭えないことだし、考えなしに歩き回るよりは効率的だろう。慌てて踵を返した時点で、殺風景な暗い路地がどこまでも続くかのように見渡せることに對して、大きな違和感を覚えた。

——すぐ後ろにいたはずのアカアリの姿が消えているではないか。

「あ……アカアリ……？」

つい先程までちゃんと側にいたはず。きよろきよろと周囲を見回すが、あの特徴的な女は影も形も見えなくなってしまう。暴れることばかり心配していたが、まさか迷子になるとは……。

先ほど店主から教わったように、今のキナリは自分が新人類であることを開けっぴ

るげに宣伝しているような風貌であるらしい。そんな状態で、この人口密度の中で独り行動しなくてはならないのか？ 急激に緊張を思い出して息をするのも億劫になる。——怖い。行き交う人々が、奇怪そうにじろじろとこちらを見ているような気がする。

門番の言葉を思い出す。女子供であろうと容赦はしないと話していた。ムロビシの言葉を思い出す。この街には星霜匪はなく、大怪我をしようものなら死に直結すると。ひとまずどうするべきか考えねばならない。誰に教わったわけでもないが、掌で口元を隠すように覆い、壁際に寄り、落ち着きを取り戻すため齷齪と思考する。そうして脈動ばかりが耳鳴りに変わるのを自覚しながら立ちすくむキナリの耳へ、突如、強烈な叫び声が届いてきた。その次に轟いたのは、助けを求め声。それも一人や二人ではない。同時多発的に、四方八方から聞こえてくる。それらがどこから上がったものなのかは、建物に反響してしまつて分からないが、尋常ではない戦慄に駆られた大声で放たれた言葉はしっかりと聞き取れた。

「亡霊だ！ 血赤の女が街に紛れてやがった！」

「刃物じゃ無理だ、銃はないのか？」

「自警を呼べ！ もう二人捕まっちゃまつてる！」

……間違いない、アカアリの仕業だろう。ムロビシの話は杞憂でも何でもなく、本当に起こり得る範囲のものだったようだ。噂話の女が現れたと叫んでいた。自警団を呼べと。さらに遠くの方から、言語を成さぬ慟哭もドーム型の屋根を劈く勢いで鳴り響いている。アカアリが何を仕出かしているのか……想像がつくだけに身震いが止まらない。

「——もし、お嬢さん」

めまぐるしく滑落していく周囲の状況に怯えていると、背後から誰かに腕を握られた。

どういうわけだか、無数の針で刺されるような痛みを肌を感じる。咄嗟に振り返ると、視界の最も下の辺りに何か映り込んでいた。視線を落としたそこには、小さな小さな人影があった。

その容姿は、書面で見た老婆そのものだった。

「——……ケエ」

老婆の腰はひしゃげたように曲がっていて、小柄なキナリよりもさらに身丈が低い。弛んだ脛から覗ける小さな瞳はキナリを見上げ、骨と皮ばかりの弱々しい細い腕を少女の手首へと伸ばしていた。しかし、妙なのは老婆のその腕にあった。掌があつて、

五本の指が生えていることに変わりはないのだが、それに握られた瞬間にキナリが覚えたのは、痒みのような、痛みのような、どちらにしても決して心地の良い感覚。老婆がケエであることを確信してからその違和感の正体を視認したのだが、それでも目に飛び込んできた物が一体どういうことなのか理解するには一寸の猶予を要した。

古びた布でできた服の袖口から見えたケエの腕は、夥しい量の棘のようなものに覆われていた。法則性はなく、やや血色の悪い肌がささくれのように鋭く隆起しては、外へ外へと向かっている。それらがキナリの肌に触れ、刺激し、微弱ながら痛みを生じさせていたのだ。怪我でもしてこんな状態に陥ったのだろうか……？ 未だに収束を感じさせない街中の騒音に気を配りながらも、老婆の奇怪な手への好奇心は止まない。

キナリの呟き声を聞き取った老婆は、誰に見せるでもないような小さな頷きの後、言う。

「私の名をご存知であるのなら、貴方がキナリさんですね？」

教えたわけでもないのに自分の名を呼ばれ、多少の警戒心は抱いたものの、これまでの出来事に比べればどうというほどのことではない気さえする。キナリがケエを知っているのだから、向こうが同様の状況下に置かれていても何ら不思議ではない。続

出する急展開に慣れ、麻痺してしまったのもあるだろう。静かに首を縦に振り、肯定を表す。

「そう、良かった……」

言葉の通り、ケエは心底安堵したような声色を放った。

「ソウさんから貴方のことをお聞きして、一目お会いしようと思いましたがよ」

「ソウ……?」

「保守派と呼ばれるお方です」

保守派。聞き覚えのある、嫌悪の対象となる単語だ。ムロビシが門番の男たちを引き合いに話していた、キナリたち廻人のことを快く思わないという人々。企みに用心し、棘だらけのケエの手を遠慮がちに払って、一歩間を置く。

アカアリの動向も気に掛かるところだが、果たして今すぐに逃げ出していいものなのだろうか。ムロビシからの頼まれ事を消化するには千載一遇の好機である。紙袋を腕の中に大事そうに抱えてじつと黙るキナリへ、ケエは穏やかに続ける。

「無理ありません。私も警戒するべき相手だと聞かされていましたから。けれど、彼は話のような悪人には見えませんのでね」

「……………」

「騒ぎの傍らでは落ち着きませんね。もう少し、通りから離れましょう。なに、ご覧の通り、私の手足は碌に使えたものではありません。婆ばばの世間話にお付き合ひ願いたいのです」

足を砂ばかりの地面に摺るようにして歩く。歩幅は狭く、どこか痛むのか、跛びこを引いている。キナリが後をついて来ることへひとつの疑心もないように、振り返る素振りも見せず、アカリを巡る喧噪が広がる大通りを避けるよう、狭い路地をひたすら進んでいく。歩む速度は遅いが、確実に離れていくケエの小さな背を放っておかず、一定の距離を保ったまま追うことにした。いろいろと不明瞭な点があるものの、ロツトランプトへ来たのは元より彼女に会うためだ。迷いはしたが、こうするしかない。アカリについては後回しだ。彼女の頑丈さは身を持って保証できる。

「……手、どうしたの」

神経を張り、最も気になる点を真っ先に問う。

「それについて、貴方にお伝えしたくソウさんを頼りましたのよ。お連れさんが気を引いてくださっているそうですし、早々に参りましょう」

「アカリのこと、知ってる？」

「お名前くらいしか。ソウさんがこうなることを予言しておられて。いくつか助言い

ただいたあと身を隠されてしまったので、私も彼がどのような思惑をお持ちかまでは存じませんのよ」

ソウという人物がこちらの事情に詳しいようなのは気がかりが、アカアリの起こした混乱に乗じてこの場を離れるのは、非力なキナリにとつても都合が良い。非常に鈍足ながらも、老婆と少女は大通りから離れ、巨大なアーケード街から、人通りも屋根もない閑散とした地区へと向かっていく。

そんな二人の後ろ姿を、屋内の窓辺にもたれ掛かりながら、遠巻きに見守る若い男がいた。立派とは言えない細い体格を覆う衣服は、かなりゆとりのあるサイズである。布の質量も高く、色味が地味な割には目立つシルエツトだ。首周りにはストールが緩く巻かれていて、それらの隙間から僅かに胸板が見える。

青年は晴れぬ表情のまま、波を描く髪をいじり、憂鬱を吐く。

「こうしてポケツと眺めるくらいしかできないんだもんなあ……」

やがてケエとキナリが遠くの建物に隠れて見えなくなると、大きく溜息をついて室内へと視線を戻す。

暖色のライトに照らされた部屋には、小さなテーブルが一脚。部屋の大きさの割に電球の照度は足りていないが、壁に飾られる赤い織物の効果で寒々しく感じるような

ことはない。青年が座っていたのは、テーブルを囲むように並べられた二つの椅子のうち片側。対面するもうひとつには、肩ほどまである黒髪が威圧的な別の男が、仏頂面を貫き座っている。その無愛想な男を振り返り、テーブルに肘をつくとき、青年は前のめりに提案を持ちかける。

「やっぱりさ、一基でもいいから街のどこかに星霜匣置けないかな」

「……金のアテもないのか？ ケエ本人がこれでいいって選んでやってんだ。俺らがこれ以上干渉する必要はないだろ」

至極真面目な様子の言葉を、しかし黒髪の男はほとんど相手にもせず、そう言っただけで一蹴した。冷めた返答であったが、青年はこうしてあしらわれることを予め覚悟していたらしい。呆れた表情を頬杖で支える。

「兄貴ってそういうところ薄情だよね」

「……用件は何だ。手短に話せ。あの二人の様子を見物に来たってだけじゃ帰れないぞ」

タバコに火をつけた黒髪の男は、伏し目がちに愚痴っぽく話す。するとそこへ、部屋の隅のキッチンに立っていた女性が、ソーサーに乗ったカップを二脚運んで寄ってきた。

先程、キナリの相手をしていた雑貨屋の女店主だ。

「せっかくタダで間借りさせてやったって言うのに、顔合わせるなり兄弟喧嘩なわけ？ 騒ぐならちよつとは家賃よこしなよ」

「俺をヒモみたいに扱うな」

「ヒモ同然じゃない。っていうか、部屋に臭いつくからタバコはやめてくれない？」

女店主を面倒臭そうに相手しながら、煙に満ちた呼気をふうつと噴く。注意された直後にその挙動とは……当てつけとしか捉えられない。大人げない悪戯に耽る兄を遮るようにして、弟の方が苦笑を浮かべて挨拶に入る。

「いやあ、メイさん。いつも兄がお世話になってます。会って話すとすぐこういう空気になるから、普段からあんまり連絡取らないようにしてるんですよ」

絵に描いたように対照的な二人へ、女店主は交互に目を配る。

「ソウくんはこんなに出来のいい子なのに……。ロウの方は何を間違えてこんな無作法な仕上がりになったのやら」

「そんなお粗末な俺を選んだのは、何処の何方かな」

「どうすればその減らず口は黙るのかしら」

兄弟それぞれにカップを置いた女は、傲慢なロウの言葉に対して満更でもないよう

に笑い、部屋の奥へと消えていった。何が楽しくて兄と恋人の遣り取りを眺めなくてはならないのだろうか。弟のソウは鉄仮面のような微笑を浮かべたまま、遣る瀬ない思いに駆られた。

「……前に会った女性とは全然違うタイプだね。面食いなのは変わらないけど」

「たまには元気な女もいいぞ」

「いま何股してんの？」

「片手指で収まる。ロットラントだけならな」

「あつは、最低だ」

毒気のない爛漫な語勢で軽蔑の一言を見舞うも、兄のロウは一つも悪びれることなく、むしろ怪訝そうに御託を並べた。

「いくら遊んだって構わないだろ。間違っただけでガキができる心配もない。合意の上だぞ？ お前は奥手過ぎる」

「俺はこれでいいの」

「なら、俺もこれでいいの」

ロウはからかって、再びタバコの煙を燻らす。

「……こうも碌でもない男が身内だと思いと悲しくなるよ」

諦めず悲嘆を漏らしつつ、懐に潜り込ませていた小さな手帳を探り当て、ロウに手渡す。掌にも満たない大きさのそれを受け取り、タバコを唇で挟んで、耳の折られたページを開いて一瞥。行線は無視して書き留められたソウの丸っこい字が、数十行に亘って綴られていた。そのうちいくつかの内容を掻い摘んで読み、鼻で笑う。

「推進派の今後の動向か……しばらくは目立たないな」

「低性能の機器で傍受できた分だけだから、信憑性は低いけど。あのムロビシって男、近々シグレとの対面取引も予定があるみたいね」

「雨毒ビジネスで荒稼ぎしてるだけなら何でもないんだが、もうちよい厄介なとこまで首突っ込んでるだろうな」

「星霜匪施設の襲撃事件も噛んでるんだっけ？」

「筆頭出資者だ。そこも含めて、善良な企業じゃないのは誰の目に見ても明らかだろ。ま、いざ蓋を開けてみたら貧乏臭い内容かも知れないけどな」

根本近くまで吸い切ったタバコを灰皿に押しつけて火を消す。手帳のページも閉じて、ソウに返却する。

「襲撃事件でしょっ引かれた廻人、結局全部研究所でバラしたらしい。五十体くらいか。廃棄担当食らったって、トイトから愚痴が来た」

「うーん……。想定内の流れかな。それにしてもさ、トイトさんもよく辞めないで研究職続けてるよね」

「俺の件もあって、辞めるに辞められないんじゃないのか。ラヤンは……。完全に自棄だな」

「どっちみち、逃げた兄貴の身代わりに別の研究所で軟禁生活強いられてるんですよ？ほんと、碌でもない男だわあ……」

「俺を庇うのが限界だと思ったら口を割れとは伝えてある。まあ、元々あの「ハコ」に連れて行かれた時点でこうなることは分かってたんだ。俺も、お前も、あの二人も」
背もたれに体を預けて、窓の外を見る。空は、今日も黒い。もう間もなく雨が降ってくる予報だ。あれほどまで不穏な雲を眺めれば、ラジオの天気予報など聞く必要もないのだが。

「雨をどうにかしない限り、この国に自由はない。状況はあの時も今も変わらないな。碌でもないのは俺以外にもたくさんあるだろ」

「お先もお空もこんなに真っ暗なんじゃ、そりゃあね」

「上手いことやってやった、みたいな顔するな。こっちが恥ずかしい」

メイが置いていったカップを、今更思い出したかのように持ち上げ、口元で傾ける。

香りの薄い紅茶だ。明らかに質は悪いが、これも国内では相当な贅沢品だろう。心遣いを感じながら喉を潤す。

不意に、兄弟の間に沈黙が流れる。別段気まずいというわけでもない、よくある無言の間。二人ともに、話すべきこともほとんど尽きてしまっただけだ。どれくらい秒数が過ぎた頃か、分厚い漆黒の雲に視線を向けたまま、ロウが独り言のような声量で呟く。

「……アカアリの様子は変わらないか」

味気ない茶を啜っていたソウは素直に頷く。

「元氣だよ。心なしか少し痩せた気はするけど」

「それは思い過ぎだな。アレはそういう体のつくりじゃない」

ソウの単なる感想に対してロウが放ったのは、一切の異論を認めない強い語気の否定であった。もし彼を知らない人間がここにいたとしたら、多少なりとも嫌悪感を抱くことだろう。親族であるソウが驚くことはないが、それでもあまり気分のいい物言いでないことに変わりはない。本日何度目かの溜息の後、諭すように言う。

「あのさあ。気になるならたまには顔でも見てみればいいんじゃないの？」

「会ったところですり寄って甘えてくるわけでもないだろ」

「ええ……そういう問題かな……」

「それより問題なのは、お前のアカアリへの対応だと思うけどな」

おもむろに立ち上がったと思うと、ハンガーに掛けていた黒いロングコートを乱雑に羽織る。紅茶も飲み切らぬ内だが、帰路につくようだ。兄の落ち着きのない生活を憐れむソウは、動じることもせず次の言葉を待つ。

「あいつは犬や猫とは違う。壊れても直せる機械でもない。ああいう扱いをさせるために世話を任せたわけじゃないぞ」

「どの口が言ってるんだか。やり方は節操がないって言いたいワケ？」

「……基を正せば、俺の身勝手が招いたって事実を棚に上げるつもりはない。ただ、最近少し目に余る」

「それは兄貴と俺の、新人類に対する考えの違いだよ」

今まで大人しかったソウも、言われてばかりは納得がいかないのだろう。語気を強めて食いかかる。

「俺は兄貴ほど洞見に優れるわけでも、コネがあるわけでもない。今はケエさんやキノリちゃん、カラスくん……手の届く範囲の廻人の生活だけでもサポートしたいと思ってる。そのためには、アカアリが嫌がらないことに関して手伝ってもらってるって

だけだ」

いきり立って立ち上がるわけでもなく、大きな声で怒鳴りつけるわけでもなく。ソウの言い分は湯水のように溢れ出て、すぐさま完結を迎えた。

「雨毒の方は、兄貴がどうにかするんだろ？」

思ってもみなかった弟の気迫に怯んだのか、ロウはほんの一瞬、応酬を詰まらせた。しかしすぐに左の口端を僅かに持ち上げると、一言のみ、返事とした。

「——当然」

それを別れの言葉に代えると、ロウは黒い髪とコートを靡かせ、革靴の踵を鳴らして部屋を後にする。恋人であるメイにも何も声を掛けずに外へと向かい、混乱の続くロットラントの人波へと飛び込んだ。そんな兄の背を変わず窓辺から見送るソウもまた、どこかおかしそうに口元を緩ませて、冷めた紅茶を啜る。

幅を詰めるように建ち並ぶ家屋の間を、ロウは足早に進んでいく。向かう先は大通り。例の騒動はソウと話しているうちに程々沈静化しているようで、鬼気迫る叫び声などは聞こえてこない。

(……自警とは鉢合わせたくない)

ロウには、このロットラントという街に長居できない理由があった。

原因はたかだか二年前のこと。国策であった新人類開発に携わっていたはずが、ひよんな好奇心を抑えきれず踏み切った行動が祟り、関係者から大罪人として扱われてしまった。ただ、それだけ。

暴発したヨサメにより放たれた雨毒からネヴェリオ国民を救済すべく旗揚げされた新人類開発機構。機構の管理する直属研究所に配置され、寝ても覚めても研究に勤しむ日々を送っていた。とは言っても、国を救うために心骨を捧げていたわけではない。親からの圧力で医者を目指していたため研究員としての素養はあつたし、医者よりは人造人間でも研究している方が、衰退し切ったこの国で生きるには有意義だと思つたまで。元々、そういう性分の男なのである。

雨毒が初めて観測された日。未知の脅威に警戒音が鳴り止まぬロットラントの街中で、ロウは怠けた双眸を皿のように並べて、常闇の空を仰ぎ見ていた。未だかつて、どんな人類も見ることがないとされる死の雨が、間もなくこの国に降り注ぐのだという。国は総力を上げて危険信号を発し続けたが、そのような大規模な災害を、自宅に籠城したところで回避できるとは到底思えなかつた。全く勝ち誇ることでできない絶対的な自信が湧いた頃には、無自覚に家を飛び出していった。自死に関心があつたわけではないが、どうせ雨ごときで死ぬのであれば、一目散に浴びて死んでやろうと意気

込んだわけだ。とにかく、人生に興味がなかっただけに、当時は迷いなど毛ほどもなかった。

——黒い雨の味といえは、舌が焼けるほどまずかったことを痛烈に覚えている。

しかし、この世は性根の曲がったもので、大人しく家に籠っていた連中はたくさん死んだというのに、直接雨に触れたロウは悪戯とも取れる数奇な境遇により生き残ってしまった。悪運だけは矢鱈と強くて滅入る。その悪運はこれだけに収まらず、もう一度望んでもいないのに力を發揮してしまったのが件の二年前。勤めていた研究所の突如としての爆破、崩落に巻き込まれたのだが、これも何故なのだろうか、生き長らえてしまった。肋骨をいくつか折る大怪我ではあったものの、今もこうして五体満足を維持しているのだから命というものは不平等極まりない。

数週間振りに訪れた街並みを横目に、瞬く間のうち過ぎ去った二年の刻を回顧していると、目指す大通りへと辿り着いていた。雨の予報が出ているとはいえ、普段なら人の往来はかなりのもののだが、まるで廢墟に來たかのように静まり返っている。この様子だと、まだ自警団も駆けつけていないらしい。全く、自警とは名ばかりの間の抜けた連中だと心奥で罵言を吐く。

宛てのある場所をいくつか覗き込んでいく内、目当てを見つける。

分断された状態で転がる複数の遺体の先、返り血で真っ赤になった女が膝を抱え、じっと一点を眺めていた。その瞳は遺体の至る箇所を頻りに追っている。白い髪、空色の瞳、透けるような白い肌……一年振りに見る女の風貌は正常な姿に「戻っていた”。崩落した研究所の天井に押し潰され、頭部を含む左半身だけで動いていた肉の塊が、ロウの記憶に残る最後の女の姿であった。それまでもその再生能力をまざまざと観察してきただけに驚きはしないが、歓迎すべき結果とも受け入れられない微々な葛藤を抱く。

これが、ロウの“ひよんな好奇心”の産物であるためだ。

「——久し振りだな」

無残に死に絶える大柄な男たちを無感動に見下ろしつつ、女へと寄る。あと半歩ほどまで近づいたところでようやく目が合った。興奮気味なのか、彼女は眩しいほどはつきりとした空色の目を大きく見開いたまま、それをぱちくりともさせようとしない。妙な威圧感に警戒しながらも、ロウは声を掛け続けることにした。過去の経験上、こういう状態の彼女に対しては、下手に動くより刺激しないで済む。

「お前、いつ見ても頭から血被ってんな」

「……………」

「初めて見たときも、最後に見たときもそうだ」

彼女との初顔合わせも、二年前。無造作に伸ばしたうねりの強い白髪は、何故か血を浴びて半分ほどが赤く染まっていた。鎮静薬で眠りに就いていた様相に違和を見、彼女を引き連れてきた担当者に経緯を聞くと、「これを外に出すときはいつもこうだ」と無骨に返された。……なるほど。高揚して暴れ出すのは今も昔も変わっていない。

「ソウから名前つけられたんだってな」

「……………」

「しかしアカアリって、安直過ぎだろ」

「……………」

ロウが一方的に語り掛けるだけであったやり取りが、アカアリの呻き声を皮切りにがらりと色味を変えた。ロウにとって、アカアリのそれは初めて目にする反応である。「——マジか。返事しやがるぞ、こいつ」

思わずニヤリと口元を歪ませるのを何とか自制し、アカアリの右脇に手を通し、引き上げて立ち上がらせる。一瞬、ロウの行動に驚いたように体を強張らせたものの、激しく抵抗するようなこともなく、ふらつきながらその場に居直った。足元がなかな

か安定しないのか、しばらく左右に体を揺らしていたが、それも直に収まり、地面に放り投げていたナイフを左手で拾い上げてからロウと見合う形になる。

衣服の一部は破損していて、そこから露わになった首、胸元、腹などに痣や切り傷が見受けられる。いくらアカアリが規格外に強くとも、数人に囲まれば無傷で済むわけもないようだ。利き手であるはずの右腕も折れているのか、腫れ上がった様子はひどく痛々しいが、それでも本人はその手の苦痛を一切表に出さないでいる。彼女は別段、痩せ我慢で無表情を装っているわけではない。生まれつき痛覚という概念がないだけだ。ロウはそれが最初から分かっているだけに、この奇妙な生き物へ特別わだかまな癖くせを感じてしまうとところがあつた。共に働いていた仲間が表立って諷ふうするほどに。

——いや。ともすれば、この嫌な感情が興味というやつなのかも知れない。それでは困る。早いところ解消しなければ生きづらくて堪らない。

微塵の思考も宿さぬアカアリの視線に刺されて、ロウは羽織を翻して来た道に戻り始める。

「こつち、ついて来い。ケエとキナリのとこまで案内する」

手招きさえせずに言うが、不思議なもので、アカアリは呼ばれたことを理解しているかのようにロウの後を追いつつ始めた。二年も前のことながら、ロウの姿形を認識して

いるのか。それとも多からず言語を理解しているのか。はたまた自身に向けて声が放たれていることだけを感じ取っているのか。あるいは単に動くものを習性的に追従しているだけなのか。いずれにしても、底の知れぬ面白味を持つ対象だと思う。

道中、ロウとアカアリは無言を貫く。アカアリから何かを発信することはないとして、ロウにはこの行動がどうにも腑に落ちないでいた。元より、いち早くこの街を離れたい身としては、ソウが企てた作戦一連の尻拭いなどするつもりはなかった。ケエとキナリという廻人についても、直接会ったこともない。そこへアカアリを押しつけに行く必要性を鑑みると……何物だか分からない不満に駆られて仕方がないのだ。もし、この精彩を欠いた思慮から逃れるためだけに歩みを止める勇気がないのだとしたら、確かにソウの言う通り、なかなかに碌でもない男であるだろう。人としての形状を保つてすらいなかったアカアリを、自身の体を癒やすまでという条件でソウに押しつけたのは、紛れもなくロウである。折れた骨を取り除いて完治に運んだにも関わらず、口先ばかり誑たぶらかかして生きているのは自覚している。罪の意識とか言うつもりはないのだが、もはやアカアリを振り返る気力もない。今の自分には、砂埃に汚れた革靴の踵を擦り、雨の気配を強めるロットラントのスラムを行くしかないのだと悟って、また、タバコを灯すのである。

アカアリが見知らぬ男と共に接近しているとは露ほども知らず、キナリはケエに導かれるまま、資材置き場のような袋小路に立っていた。錆びたトタン板や腐食した木材、途中で折れた管材などが、壁の崩れ落ちた家屋に立て掛けられている。ただ乱雑に置かれているわけではなく、ある程度の整頓がなされているのを見ると、いずれも壊れているようだが、今後とも雨を凌ぐための補修材として使用されるのを予見できる。そういった建材の横、ケエは雨風で朽ちかけた木製箱へと背を預けて静かに座り込み、棘の腕を擦る。

「……体中が痛くて敵いませんのでね」

言って、皺だらけの顔を、何故だかホッと綻ばせる。どうして痛いのに笑っているのだろうか。幼いキナリに、その真意は分からなかった。

行き止まりまで来てしまっただけは、いよいよ体を動かす理由もなくなり、落ち着きを得るにはどうするべきか、小さな空間をキョロキョロと見回す。しかし何も頼りがないこと知ったキナリは、壁際にそっと身を寄せることで視界を狭めることを試みる。あちらもこちらも多くが見えていると却^{かえ}って不安になるのだ。互いが所望する位置を確保したのを察すると、やがてケエが口を開く。

「さて。時間もありませんし、手早くお話しさせていただきますましようね」

滑らかではないものの、丸っこくて愛想のある声が静寂にぼつりと転がる。

確かに、小さく吹く風に乗って届く湿度は、底なしのように上昇を続けている。時計を持っていないために時刻を確認する手立てもないのだが、集合の合図としてムロビシから言い渡された昼の鐘も、今頃は着々と準備を始めているのではないだろうか。次の身の振りを考え巡らせて黒空を眺めて耽るキナリに、ケエは優しく問いかける。

「キナリさんは、星霜匣について保護班の方からどの程度のことを教わっているのかしら？」

どの程度とは、どういうことなのか。キナリは小首を傾げ、眉を僅かに顰めて疑問を体現すると、ケエは静かに頷いた。

「ごめんなさい、分かりづらい聞き方をしてしまつて。私の親に当たります御方からお話しいただいた星霜匣についての知識といえ、旧人類の皆さんが扱う家具に言い当て嵌めるのであれば、お風呂やベッドのような物に近いというお話が最初でした」

「……わたしも、ムロビシにそう聞いている。星霜匣に入れば傷も治る」

「ええ、確かに。けれど、ソウさんからお聞きするに、それは概念としての教えに過ぎないそうです。大事なものは、そこではありませんの」

ケエが語ることがいかに重要なことなのか……そればかりは予測もつかないが、い

ずれにせよ、キナリにとつて知識欲を刺激されるものであるに違いない。そう想像し、期待と不安を胸に微かに高ぶる中でも、ケエの口から再び出てきた見も聞きも知らぬ人物の名にばかり気が行ってしまつて仕方がない。すでに一度問いかけたことだが、念を押して尋ねることにする。

「ねえ、ケエ。結局、ソウつて誰？」

「先程お話ししたように、保守派の方であるということ以外、ほとんどのことは知りませんのよ。本当に」

「……知らない人なのに、言うこと信用するの？」

同じ問いを投げたところで、返ってくる内容もまた、同じであつた。実に不毛な遣り取りを終え、キナリはなんとも理解できないケエの感覚をちくりと刺すのだが、彼女はそんな些細なことで身構えることなどなかつた。

「そうですね。ああ、ひとつ言うならば、世話焼きの好青年といった風貌かしら。悪い人かどうかは分かりませんが、お顔はなかなかいいのよ」

可愛らしくてね、と冗談を言つて小さく笑う。

「ロットラントから少し離れた場所に、ベンゼルという集落がありました。私は……いえ、他にも老いも若きも、生まれたばかりの廻人がたくさんいましたから、私た

ち”と言うべきでしょうか。私たちはそこで、フウメイという名の女性によってつくられましたの。黒髪を綺麗にされて、艶っぽい、よく笑う御方なので——」

愉しように話していたところ、「いやね、もう話が逸れてしまつて」と軌道を修正する。カラスやムロビシと比べるとあまりにも調子が穏やかなために、いちいち反応に困って呆氣に取られてしまうのだが、そんなキナリの一挙一動は目端に映りもしないのか、老婆の独り劇は続く。

「元より留守にしがちな御方ではあつたのですけれど、三日ほど前から忽然と姿を消してしまわれて。あれ、フウメイさんはどうしたのかしらと仲間内に話していたら、ウォーアンという名の、飛び切り小柄な男の子が私の元へ来ましてね。血相を変えながら話してくれましたのよ。星霜匣が動かないんだつて」

フウメイとウォーアン。また知らない人名が出てきた。直接自分には関係のない思ひ出話だと捉えて、ここは何も口を挟まずに聞き過ごそうと決め、キナリは壁に背をつけ、体重を預ける。その間、ケエは少しばかり俯いて、ほうと浅く息をつく。

「旧人類の方々は、活発に働けば働くほどに、自然と睡眠というものを欲するそうです。安静にすることで疲れが癒えるのだとか。ところが、廻人にはその機能が備わっておりませんのね。星霜匣が、私たち廻人の体を癒やす物であることは確かですが、

反して言えば、あれがなくては私たちの体は癒えないのです。この話は決して怪我のみに限りません。疲労を全く感じないのではなく、疲れが蓄積していくことに鈍感なつくりなのです。星霜匣を頼らずに生活を続けければ、私たちが廻人であるからには遠からず死に至るのだと——フウメイさんから教わったのはここまで」

声が乾いたのが気になったのか、ケエは咳払いを経ると、もう少し、棘の腕を労るように撫でる。やはり痛むのだろうか。寄りかかった壁から漂う黴のような臭いを感じながら、キナリはケエの身を黙して案ずる。不信感がないわけではないが、彼女の寛厚露わな語りを聞くだけでも、疑心が自然と晴れていくのを自覚していた。

そして何よりも、ケエから語られる多くが未知であり、キャレーの地下室から始まった自身の空虚感にも似た知識欲を、それらが穴を埋めるように満たしていく。廻人とはどういう人間なのか。少なくとも、その根元に触れているのを強く実感している。唇を噛みしめ、得体の知れぬ高揚を表に出すまいとするキナリの装いに気づいているのかも顕さぬまま、ケエは静かに言葉を連ねる。

「私たちはどうしても、死というものがよく分からないのです。あのとき事の深刻さを察していたのはウォーアンだけでした。それから半日とせずして、彼は私たちの元を離れ、姿をくらませてしまったのですが、後を追う仲間はおりませんでしたね。み

なしてフウメイさんの帰りを待っていたのですけれど、終ぞ叶わず、今に至ってしまいました」

ケエの操る言葉は独特で、ややこしくて理解できないところがある。気軽に問いかけて良いのか分からないほど不安なものであったが、なんとなくでしか把握できていない部分を確認するよう、キナリの口から問う。

「……ケエ以外の廻人はどうしたの」

ケエが率先して語り始めたことを考えると、今この機会に解消するべき疑問なのだろう。彼女がどうしようとして街外れまで来たのか……徐々にキナリの勘が冴えてくる。

「そうですね……消えていったのは若い者からでした」

一変して落ち着いたケエの声に、顎先から首元、背筋へ、ぞくりとした冷たい気が流れる。

「昨日の昼を過ぎあたりから、揃って体の各所に痛みを訴えまして。ちようど今の私の腕のように、皮膚が固くなり、逆立ち、白化したと思った頃には、それぞれ音もなく崩れ、風に乗っては散り散り消えていくのです」

「消える……？」

「ええ。話だけでは想像がつきませんでしょう。大層に綺麗なものです。よ。みんな、そのときには泣くこともなく、ただ静かに空へと消えていくものですから」

最後はほとんど独白のようであった。ケエは懐かげに話しながらもずつと腕を擦っていたが、徐に動きを止めたと思うと、掌を広げてじつと眺める。そこには菱形を象ったような純白がびっしりと付着していた。腕から突起していた棘が剥がれてしまつたらしい。少し離れた場所にいたキナリが目を見張るほどはつきりと、大量に分離していた。その時点でいくつかの思考を終えたのだろう。ちよつとの時間を黙したケエがようやくキナリを見上げると、悲しそうに独り笑う。

「これが、廻人の死の形だそうです」

そう言い放った唇も、頬も、すでに皮膚の白化が進行していた。言葉を口にするだけの僅かな動作ですら、見る見るうちに隆起していく皮膚は葉のように揺れ、耐えきれずはらりと地面へと落ちていくのだ。

||||| **最新ココカラ** |||||

「——ケエの言っていること、あんまり分からない……かも」

ケエの容態の変化から危機を悟り、半歩前のめりながら声を上げる。

ケエを蝕む一連の現象を目の当たりにしてもなお、キナリはどうしてもそれが人体に起こり得るものとして認識できずにいた。ケエの言う「死の形」と、キナリの知る「死の形」が全くもって異なるためである。

キナリが唯一目にしたことのある「死の形」といえば、カラスが手を掛けた老人——ふたりの親に当たる、年老いた男の最期。首を絞められ、呼吸がままならず苦しむ挙動は次第に鈍化し、やがて一切の活動を諦める以外、外見に変化はなかった。当時を思い返して記憶を遡ってみるのだが、目で見たことのある死、あるいは初めから備わった死の言語的な定義のいずれもが既知のものに違いない。

しかし、ケエから聞かされた話ではどうか。体が紙のように剥がれ落ち、散って消えていく——？ およそ嘘のようなことだが、ケエの現状を見る限りでは、彼女の言い分に矛盾は見られず、また、思考を巡らせたところで、彼女が嘘をつく利点も思いつきはしない。そうだとすれば、キナリよりもよほど自身に何が起こるのかを予見しているであろうケエが、わざわざ他者の目を避け、時間をかけ、有益な情報を与えてくれているのだと考えてもいいのではないか？ 不慣れな親切心が、キナリの疑念の解消を殊更に阻み続ける。

「……それって、星霜匣があっても治らないの？」

強いて訊いておくべきことだろうと思つた。星霜匣を使わずして発現した奇病なのだとすれば、治癒を助長する星霜匣を再度使用すればいいはず。

キナリの目に隠しきれない焦燥が浮かぶ。ケエの証言の通りの変化が、自身にも起こり得るものであるからだ。せめて「詳しいことは分からない」と濁して欲しいと願う少女の思いは、ケエのはつきりとした頷きにより、まるで聞き入れられることなく終わりを迎えた。

「白化が始まってからでは、もう遅いそうです。人によって差はありますけれども、おおよそ三日の間、星霜匣から遠ざかった廻人は等しく死を迎えると……。何十人といた仲間が一斉に目の前からいなくなつてしまつたのですもの。ソウさんのお話、嘘ではないでしょう。もちろん、フウメイさんも嘘を言つてはおりませんけれど——」

呼吸も浅くそう語るケエの表情に、初めて翳りが浮かん^{かげ}だ気がして、キナリの中の不鮮明だった感覚が、ひとつ、閃光のように煌めき、弾けた。

見聞きした無数の情報に対してキナリが不信感を抱くように、ケエもまた、同じく誰かを疑うことがあるようなのだ。いつも傍にいるカラスは疑いを深化させることをしない質だし、ムロビシは一切の詮索を許してはくれず、アカアリに至っては思慮を

心得ていないという。これまで余所の環境を知る由もなく生活してきたため、自らの置かれていた環境に少しの違和感を覚えることもなかったのだが、それが今この瞬間、何とも代替できない異質へと形を変えたように思える。

善し悪しの話ではない、果てなく感覚的な問題。多量の知識を持ち合わせていながら、活用方法を知らないという廻人の性質への理解……とでもいえるべきだろうか。決して長い時間ではなかったが、ケエとの遣り取りを経ることで、「対話」と呼ばれるコミュニケーション手段の本質的な部分を経験した気がしたのだ。そして同時に、この感覚の起因が、ケエの目的であることも悟ってしまう。

キナリの中で強固に封されていた激情が、滾々と湧き出てくる。言うなれば、カラスを振り回して止まないモノが、これか。放散できないで沈澱する不安が喉の渴きを誘発し、指先から温もりを奪い、視点の震えにまで現れる。あと少し、この昂揚が強まれば、到底自我など制することはできない。

しかし、キナリのその恐怖に歩調を合わせられるほど、ケエもゆつくりはしてられないよう。分かっているからこそ、こうして表には出せないような毒気を堪えているのだが、ケエとしても、終末を急ぎ、言葉を残すことは止められない。

——ケエは今、ここで、廻人として死ぬ。キナリという、見ず知らずの廻人の少女

の目の前で死ぬことを選んだのである。初めて顔を合わせてから、まだ数十分といったところだが、その間に紡がれたケエの言葉の端々に彼女の覚悟は表れていた。最初は何を言っているのかと甚だ疑わしかったが、結論が明確になってしまえば簡単なことだ。

「ソウさんが私の元を訪れてきたのは、昨晚のことです。もうほとんどの子たちは跡形もなく逝ってしまっていました。彼はどうかやらこうなることを予知していたように、姿を現すなり矢継ぎ早に、事の真相と言いますか、彼の持ち得る情報を私に教えてくださいましたの。彼が保守派であることや、違う境遇に置かれる廻人の方々の生活ぶり。先ほど私からお話ししたような、星霜匣に関する知識。そして最後に、私の生きられる期限についても」

当時のことでも思い出しているのだろうか。まだ一日も経っていない出来事を、まるで昔話のように語る。皺に隠れた老婆の目口から詳細な感情を読み取るのは難しい。「私たち以外の廻人の方々に、どうしても死という様式についてお伝えしたかったです。知りたくもないお節介でしょう？」

知りたいか、知りたくないか。どちらだろうか。今すぐに判断はつかなかったが、徐々に血色を失いゆくケエを眼前に、首を横に振ることはできなかつた。

「けれども私たちの人生は、あまりにも他人の介入に依存しています。得られる情報や行動も制限され、ついには何も知らぬまま死した廻人も、きつとたくさんいたことでしょう。空へ消えた仲間も、私も、きつとその一人」

「ケエも死ぬってこと？」

「ええ。きつと、間もなく」

「……………」

「不自由の多い人生を歩むことを強いられる場面も多いでしょうけれど、自分ではない誰かの言葉を受け入れることで、右か左か、あるいはもう少しばかり違う道を選択する機会が得られるように思えます。どうか、キナリさんにはそうあって欲しいと願う、文字通りの老婆心です」

「……ケエは難しい言葉、たくさん知ってる」

「キナリさんとそう変わらないほど、産声を上げてからの日は浅いのですよ。誰に教わったわけでもないのに、自然とこうして話すのだから、私たちを生んだ旧人類の方々というのは大層に賢いのね」

ケエは浅い呼吸を挟み、視線をキナリからやや離す。遠くに赤と黒、ふたつの人影が見えたためだ。似たような背丈の、キナリやケエよりも遙かに大きな、おとな。

「アカアリ……」

だらりと垂らした細い腕と、白い髪。透き通るような青い瞳には一切の生氣はなく、じつとこちらを見つめている。黒い服は所々が破れ、普段よりも露出の多い肌のはとんどは、誰かしらの血に染まり、真っ赤。この国において、数日に一度あの狂氣的な風貌を取る人物と言えば、アカアリ以外にそういるものではないだろう。

「……お連れの方、戻ってこられたのですね」

良かった——安堵したように、ケエが呟く。挙動も落ち着いているようだし、確かに良かったと言えばその通りなのだが、よく全身血濡れの人間を見て取り乱さずにいられるな、と、キナリは思う。

それにしても、アカアリの隣に立つ人物は誰なのか？ 髪も服も黒尽くめの、男と思しき人物に警戒しながら、脇目にケエの様子を振り返ると——最も白化の進行していたケエの右腕が、半ばからすっぽりと抜けたかのように地面へと落ちていた。およそ人体とは思えぬほど無造作で、出血もなければ、音も立てずに。

俄には信じられない光景を目の当たりにしたキナリは、状況整理のために一瞬の間を費やし、とにかく傍に寄ろうと踏み込んだのだが、そのほんの些細な時間のうち、ケエから分断された腕は紙吹雪のようにかさかさとした小さな音を立てながら散り散りに

なつて崩れ、僅かに吹く風に乗つて宙を舞う。真つ白なそれは、黒い雲へ吸い込まれるように空を目指す。その様子を目で追ひ、呆氣に取られるキナリをよそに、ケエの体は堰を切つたかのように、同様の現象が全身へと伝播し、乖離を急ぎ始めた。

「ケエ……！」

「……イヤね、私では醜いかしら——」

この期に及んでまで、ケエはほうと息を漏らして笑う。くしゃりと形を変えてしまつた紙袋をその場に落として駆け寄るキナリへの手向けのようにであつた。ケエの前に迫り着くと、膝を擦り剥くことも厭わず座り込むのだが、そのときにはすでに会話もままならぬほど体を喪失し、いくつか瞬きを経る頃には、つい先程まで言葉を交わしていた人間は、ここには最初からいなかったかのように、廃墟に囲まれた袋小路の隅に、真白の物体が大量に残るだけであつた。

「お前がキナリか」

言葉もなく、風に震えるケエの痕跡を見下ろすキナリの背に、気怠げな低声が当たる。アカアリと共にいた男だろう。視線を向ける気力もなく、身動きひとつ取らずに、キナリは問う。

「あなたが、ソウつて人？」

「それは俺の知り合いの名前だ」

「……」

「アカアリは届けてやったからな。ケエとの別れが済んだら、こいつの鼻を頼りに車まで戻れ。ムロビシに詳細を話す必要はない。問われたとしても、カラスはともかく、お前なら逸らかすくらいはできるだろう。騙そうとまでしないでもいい。どうせ無理だからな。とはいえ、お前が従順でないと知れば、あのおっさんも隙くらい見せるはずだ」

全てを知った風に、ただ淡々と、男は注意を並べ、すぐさま踵を返したようだった。ほとんどの音が死んだ路地裏に、男の足音だけが耳を刺してくる。

「——ソウじゃないなら、あなたは誰」

男の方を振り返ろうとはしない。雨を感じさせる風が一陣吹き込んで、ケエを低い空へと攫いゆく様を、にべもなく眺望徹するのを諦めきれないからだ。

「ソウに会って聞け。まじで雨まで時間ないぞ。まずはおうちに帰ってから、どうしたいかよく考えな」

男は結局名乗ろうとせず、恐らくはアカアリへ「またな」とだけ言い残して、質の悪い砂利道を返って行った。この僅か半日にも満たないうちに起こった数々の出来事

が、キナリの送る日々をしばらく占領するのは忌避ならぬこととなる。

——ケエの純白の遺体が宙を舞う情景は、言に偽りなく、痛く美しいものであった。